

茨城県行方郡麻生町

十三仏遺跡

第2次発掘調査報告書

1999年12月

十三仏遺跡調査会
麻生町教育委員会

序

霞ヶ浦と北浦の二つの大きな湖に面し、水と緑の豊かな自然に恵まれた麻生町。古代より人々が生活するうえで恵まれた環境であった本町には、幾多の歴史が刻まれた埋蔵文化財をはじめとする貴重な文化財がたくさん残されています。

町では、これらの埋蔵文化財を保護し、後世に継承することの重要性をふまえ、その対応に努力しているところではありますが、近年の開発事業の増加する中での遺跡の現状維持保存は年々困難になってきております。

このたび、麻生町青沼十三仏の土砂採取場計画地内には、埋蔵文化財包蔵地が所在しておりました。文化財保護の立場から協議を重ねましたが、現状維持保存が困難であることから、やむを得ず発掘調査をして記録保存することになりました。

調査にあたり、県教育庁文化課の指導のもと鹿行文化研究所・汀安衛氏を調査主任として、地元の方々の協力を得て調査を完了することができました。ここに関係各位のご指導、ご協力の賜と深く感謝申し上げます。

又、調査経費を負担して下さいました株式会社藤工代表取締役藤崎比左枝氏に対しまして、深甚なる敬意と感謝を申し上げます。

最後に、本書が幅広く活用され、貴重な文化資料となることを期待申し上げごあいさつといたします。

平成11年12月

十三仏遺跡調査会長
麻生町教育長

橋本 豊榮

凡　　例

1. 本報告は、茨城県行方郡麻生町大字青沼字十三仏 989、2991—5 に所在する十三仏遺跡の土砂採取に伴う、記録保存の発掘調査報告書である。
1. 本遺跡は 1998 年 10 月に第 1 次調査が行なわれた。すでに報告書が刊行されている。
1. 本遺跡の調査は鹿行文化研究所の 汀 安衛 が担当した。
1. 本遺跡の調査は 1999 年 7 月、9 ~ 10 月にかけて行なった。整理は同年 8 月から 12 月まで行なった。
1. 整理は、遺物の整理を、汀 と 戸島和子が行ない図面整理を前田京子、遺物の実測を戸島、前田が行ない図版、原稿は 汀 が行なった。
1. 本報告書の縮尺は原則として造構は 1/30、遺物は 1/3 を基準とし、水系レベルは図中に表示した。
1. 本調査に際し次の方々に協力を受けた。記して感謝を表したい。

茨城県教育庁文化課、鹿行教育事務所、麻生町教育委員会、㈱藤工、箕輪リース。

調　　査　　会　　組　　織

役　職	氏　　名	所　　属
会　長	橋　本　豊　榮	麻生町教育委員会教育長
副会長	辺　田　弘	麻生町文化財保護審議会会長
理　事	長　峯　善　男	麻生町文化財保護審議会委員（大和地区）
〃	平　輪　一　郎	麻生町文化財保護審議会専門調査員
〃	植　田　敏　雄	麻生町文化財保護審議会専門調査員
〃	汀　安　衛	調査主任 鹿行文化研究所
〃	藤　崎　比　左　枝	㈱藤工 代表取締役
〃	高　木　俊　博	麻生町教育委員会生涯学習課長
監　事	佐々木　久　美　子	㈱藤工
〃	小　室　旭	麻生町出納室長
幹　事	額　賀　修　一	麻生町教育委員会社会教育係長
〃	石　川　真　一	麻生町教育委員会主事

目 次

序 文			
凡 例			
目 次		1
挿図目次		2
写真図版目次		3
I 遺跡の位置と環境		5
II 調査に至る経過		5
1. 調査に至る経過		5
2. 調査日誌		5
III 調査の概要		6
IV 遺構と遺物		8
1. 住居跡	8	48
第1号住居跡	8	48
第2号住居跡	11	48
第3号住居跡	13	49
第4号住居跡	15	49
第5号住居跡	16	49
第6号住居跡	17	50
第7号住居跡	19	50
第8号住居跡	22	50
第9号住居跡	24	51
第10号住居跡	24	51
第11号住居跡	28	51
第12号住居跡	31	51
第13号住居跡	35	51
第14号住居跡	35	51
第15号住居跡	39	51
第16号住居跡	43	53
第17号住居跡	45	53
第18号住居跡	47	53
2. 土 坑	48	53
第1号土坑	48	53
第2号土坑	48	
第3号土坑	48	
V 総 括		55

挿 図 目 次

第 1 図	遺跡周辺地形及び位置図	4
第 2 図	調査区・トレンチ配置造構全測図	7
第 3 図	2次調査区と造構位置図	8
第 4 図	第 1 号住居跡出土遺物実測図	9
第 5 図	第 1 号住居跡出土上遺物実測図	11
第 6 図	第 2 号住居跡 窟・出土遺物実測図	12
第 7 図	第 2 号住居跡 出土遺物実測図	13
第 8 図	第 4 号住居跡 窟・出土遺物実測図	15
第 9 図	第 5 号住居跡 窟・出土遺物実測図	16
第 10 図	第 6 号住居跡 窟・出土遺物実測図	18
第 11 図	第 7 号住居跡 窟・出土遺物実測図	20
第 12 図	第 7 号住居跡 出土遺物実測図	21
第 13 図	第 8 号住居跡 窟・出土遺物実測図	23
第 14 図	第 9 号住居跡 窟・出土遺物実測図	25
第 15 図	第 10 号住居跡 窟・実測図	26
第 16 図	第 10 号住居跡 出土遺物実測図	27
第 17 図	第 11 号住居跡 窟・実測図	29
第 18 図	第 11 号住居跡 出土遺物実測図	30
第 19 図	第 12 号住居跡 窟・実測図	31
第 20 図	第 12 号住居跡 出土遺物実測図	33
第 21 図	第 12 号住居跡 出土遺物実測図	34
第 22 図	第 13 号住居跡 窟・出土遺物実測図	36
第 23 図	第 14 号住居跡 窟・実測図	37
第 24 図	第 13・14 号住居跡出土上遺物実測図	38
第 25 図	第 15 号住居跡 窟・実測図	40
第 26 図	第 15 号住居跡 出土遺物実測図	42
第 27 図	第 15 号住居跡 出土遺物実測図	43
第 28 図	第 16 号住居跡 窟・実測図	44
第 29 図	第 16 号住居跡 出土遺物実測図	45
第 30 図	第 17 号住居跡 実測図	46
第 31 図	第 17 号住居跡 出土遺物実測図	47
第 32 図	第 1・2・3・4・5・6 号土坑実測図	49
第 33 図	第 7・8・9・10・11 号土坑、ピット 1、F P - 1 実測図	50
第 34 図	第 12・13・14・15・16・17・18・19・20・21 号土坑実測図	52
第 35 図	第 22・23・24 号土坑実測図	54

写 真 図 版 目 次

- PL-1 平坦部（南側から）、平坦部（西側から）、1号住遺物出土状態、1号住完掘、2号住遺物出土状態、2号住完掘、4号住完掘、5号住土層
- PL-2 斜面部造構検出状態、調査終了後の全景、調査終了後の全景（西側から）、6号住完掘、7号住遺物出土状態、同完掘、8号住完掘、9号住完掘
- PL-3 10・11号住完掘（北側から）、10号住完掘、11号住完掘、12号住完掘、13号住完掘、14号住遺物出土状態、15号住完掘、15号住遺物出土状態
- PL-4 15号住完掘、16号住土層、17号住完掘と23号土坑、18号住完掘、1号土坑完掘、2号土坑完掘、5号土坑完掘、6号土坑完掘、
- PL-5 7号土坑完掘、8号土坑完掘、12号土坑完掘、13号土坑完掘、14号土坑完掘、15号土坑完掘、16号土坑完掘、17号土坑完掘
- PL-6 18・19・20・21・23号土坑完掘、1号住居跡出土遺物
- PL-7 2号住・4号住・7号住居跡出土遺物
- PL-8 5号住・8号住・10号住居跡出土遺物
- PL-9 12号住居跡出土遺物
- PL-10 11号住・13号住居跡出土遺物
- PL-11 14号住居跡出土遺物
- PL-12 15号住・16号住居跡出土遺物



第1図 遺跡周辺地形及び位置図

I 遺跡の位置と環境

本遺跡は、茨城県行方郡麻生町大字青沼 989-2、991-5 の標高30~31mに所在し北浦湖西岸から樹枝状に刻まれた開折谷が行方台地中程迄伸び、やや中央部に近い半島状台地に占地する。一部は東向きのなだらかな斜面部に15軒程が散在、台地中央部は50a程に5軒が散在して検出されている。遺跡は台地中央部に近く周辺は煙草畑とサツマイモの畑、豚舎やビニールハウスが散在し農業の盛んな地域が読み取れる。東南側には遙かに鹿島工業地帯の煙突が遠望される。周辺には北側に幅100m程の水田を隔てて濁酒祭りで著名な青沼地区の集落が散在している。

本遺跡は、このような自然環境に恵まれた台地上に位置している。特別な遺跡は周辺ではない。さも近いものに根小屋古墳群が東側1kmに、さらに東側500mに根小屋『要害』が位置する。

II 調査に至る経過と日誌

1. 調査に至る経過

十三仏遺跡は、平成10年10月に常総考古学研究所により第1次調査が実施された。

株藤工から土砂採取工事をさらに広げたいと申し出があり、工事に先立ち記録保存のための発掘調査を行うことに合意した。

調査は鹿行文化研究所に依頼した。

2. 調査日誌

本調査は、土砂採取工事に先行する記録保存の為で遺跡は道路を挟み東西に別れ台地平坦部は、7月1日から開始し9日までの7日間、斜面部は9月17日から10月14日までの19日間で、古墳時代後半の住居跡17軒と住居跡状竪穴1基、土坑24基が検出された。土坑の時期は大多数が不明である。

以下2回にわたる調査経過を箇条書きに述べる。

7月1日 耕作土の除去を開始する。テント設営、道具搬入。

7月2日 本日より遺構確認作業、1号住居跡より調査を開始する。

7月5日 1号住居跡は1次調査の未調査遺構で和泉期の遺構。

7月6日 2号住居跡、土坑の調査。遺構確認作業。

7月7日 3号住居跡調査、浅い遺構でプラン確認出来ず。

7月8日 4、5号住居跡調査開始、傾斜面の為片側は欠失。

7月9日 写真、全測図作成、テント、道具等かたづけ。本日で平坦部の調査は終了とし、残在部の斜面は作物の収穫を終了した時期とする。

9月17日 本日より残り部分調査開始、斜面部の表土除去、遺構は散在的、少ない。

9月18日 遺構番号は平坦部の続きとした。調査は6、7号住居跡から開始。

9月20日 7号住居跡のカマド東側からカメ、瓶がまとまって出土。5点。浅い。

9月21日 8、9号住調査開始、休む人が多い。6住土層ベルト除去後平面図作成。

9月22日 6、7号住遺物上げ、8、9号住調査やや深い。

- 9月23日 8号住居跡調査、10号住調査開始。休み多い。暑い。
- 9月24日 10号住居跡調査、大型、辺約10m前後、カマドは全て北壁。12号住調査開始、カマドの東側でカメ、坏、額出土。
- 9月25日 カマドは一部生きのものが多い。6、9、10、11、12号の掘込みは深い。
- 9月27日 10号住ベルト除去。13、14号住は、やや浅い。13号から遺物多数。
- 9月28日 13号住調査。12号住ベルト除去。カマド調査。14号住居跡調査。
- 9月29日 14号住ベルト除去。13号住遺物取り上げ。休み多い。
- 9月30日 15号調査開始。カメ、坏、支脚出土。13、14号住居跡平面図作成。
- 10月1日 15号住調査。16号住調査開始。12、13、16号住カマド調査。
- 10月4日 17号住調査。16号住遺物平面図。土坑調査開始。
- 10月5日 17号住調査。18号住調査開始。土坑調査。
- 10月6日 18号住調査。17号住ベルト除去、15号住ベルト除去、柱穴調査。
- 10月7日 8、11号住調査開始。浅い。13、14号住居跡エレベ作成。
- 10月8日 15、16号住カマド調査。14号住カマド平面図作成。17号住平面図。
- 10月9日 16、17号住カマド調査平面図。シルバー人材の5人は8日で終了。
- 10月12日 8、11号住4人で調査、図面作成。
- 10月13日 8、11号住カマド調査、図面作成、調査はほぼ終了。全測図作成。
- 10月16日 残った土坑、住居跡の写真撮影、本日で全ての作業終了。

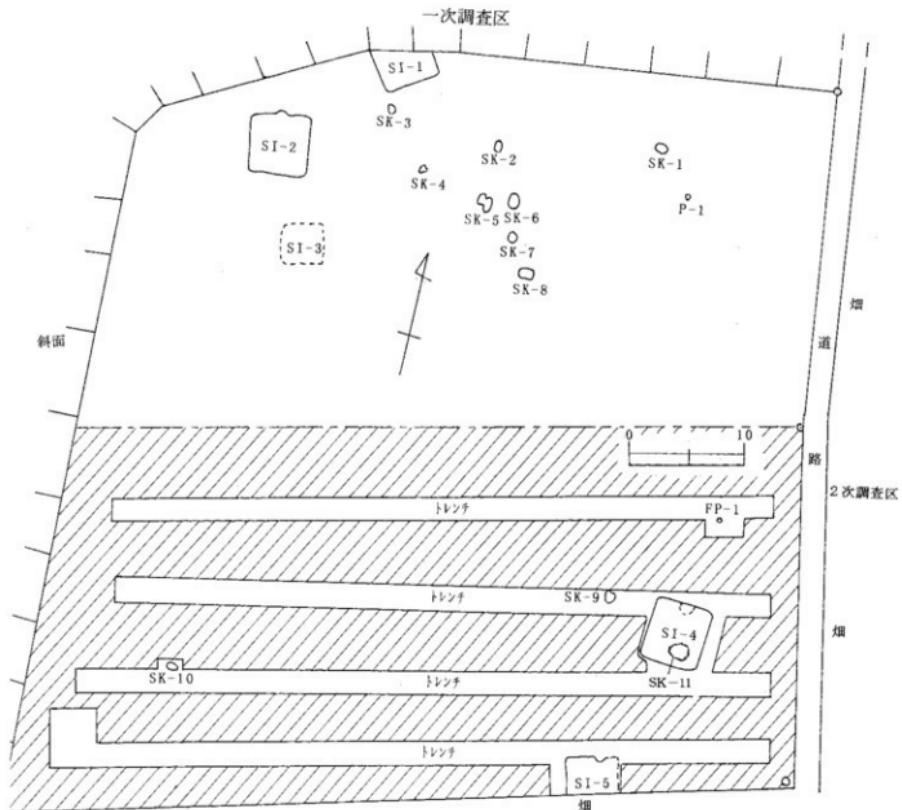
III 調査の概要

本遺跡は、一次調査で台地先端平坦部の調査がなされ、9軒の住居跡と長方形プランの小型の竪穴状遺構が1基検出されている。内訳は縄文時代の住居跡が1軒、古墳時代の住居跡が6軒、奈良時代の住居跡が1軒、平安時代の住居跡が1軒と報告されている。

二次調査では平坦部で5軒、東側の傾斜地区では13軒の住居跡と竪穴状の掘込みをもつ小型の遺構1と土坑24基が検出された。

これらを細別すれば古墳時代中葉の和泉期の住居跡1軒、後半の鬼高期の住居跡13軒、奈良時代の住居跡3軒、平安時代の住居跡1軒であった。鬼高期の住居跡が卓越するが細分が可能である。本調査部分では縄文期の遺構は土坑に見られるだけで住居跡は検出されていない。土坑は遺物が皆無で時期を特定するものは土層のみで、これらから判断すれば大半は黄橙色層で縄文期の遺構と推察される。

調査面積8,000m²の割りに遺構は少なく散在的であった。住居跡の位置関係は1、2図に見られるとおり複合関係、切り合いではなく近接する遺構でも5m前後の位置関係である。検出された遺構は1軒を除きカマドを北壁に位置し柱穴はほぼ4本を原則として掘り込まれていた。住居跡プランは大型のものは一辺が10m前後を測る大型のものも4軒程度見られた。これら大型の遺構は概して北に近い方位を示し、7m前後の遺構は若干西に振れる。掘り込みは全体に深く遺存状態は良い。17号住居跡とした遺構は周辺に一段もつかの判断の出来ないものと、床面の西側、高い部分に周溝が2段に巡り変則的な遺構も見られた。



第2図 調査区トレント配置遺構全測図

遺物は、住居跡によって極めて偏在を示し7、12、14、15号はカマド東側からカメ、瓶等が完形で出土し、他の遺構では遺物総数が100片前後と少なく検出された遺物は両極に分られる。総じて各住居跡とも遺物は少ない。特別な遺物は見られないが土製の丸玉は非常に少なく、本遺跡の生活基盤の割合の中で漁の占める割合は少ないと理解されるが遺跡の立地の関係もあり断定は出来ない。

カマドは大半の遺構が生きており、天井部が遺存していた。用材は全て砂質粘土を用い構築されていた。2軒程高窓を支脚として利用し1軒は土製支脚を用いていた。

土坑は、前述のとおり円形状が大半を占める。時期を特定出来る遺構は少ない。その他ファイヤーピットが1基検出されている。

以上が本遺跡の調査の概要である。



第3図 2次調査区と遺構位置図

IV 遺構と遺物

1. 住居跡

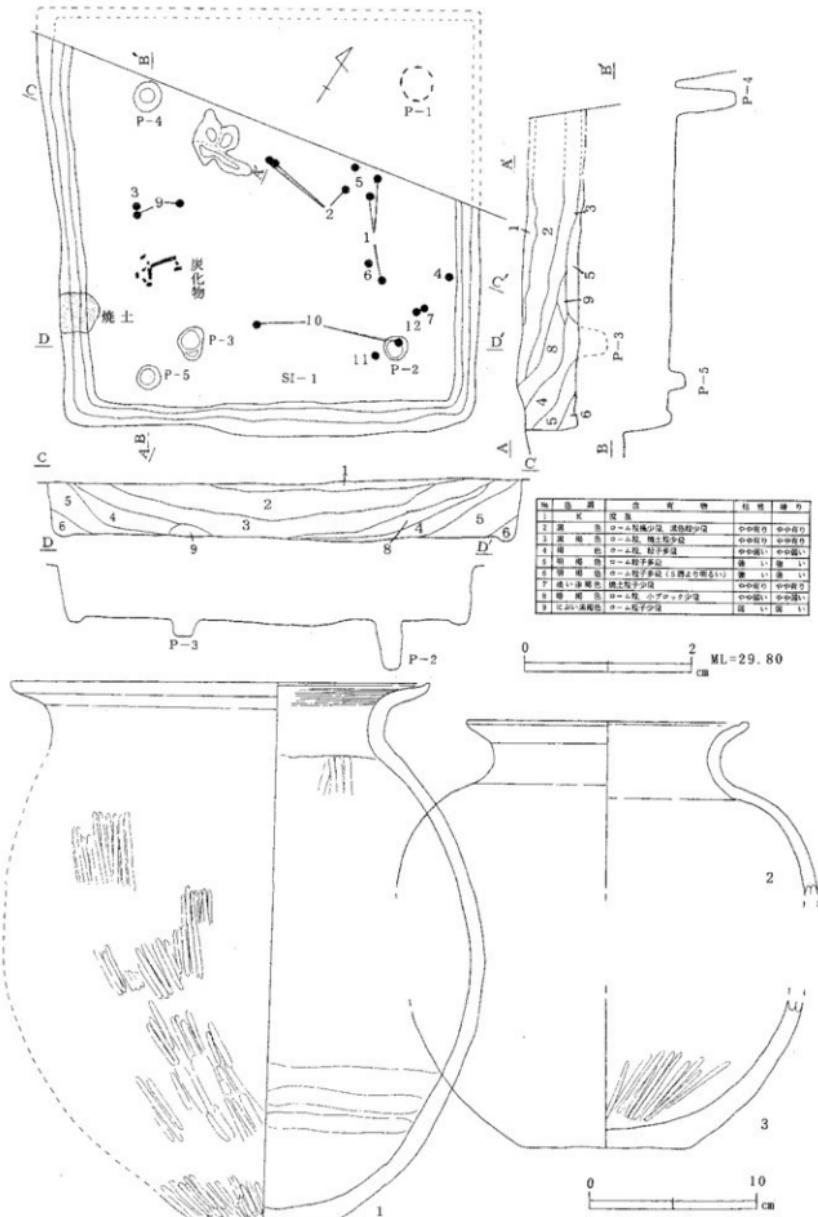
本跡は、事業者の都合により2次、2回にわたり調査が行なわれた。1次調査は、台地先端部分で9軒の住居跡が検出されている。今回の調査でも17軒の住居跡と土坑29基が検出された。以下、住居跡の概要、出土遺物について述べていきたい。

第1号住居跡（第4図、5図、図版1-3）

本跡は、調査区の北端、1次調査時未確認の住居跡で遺構北側が削平され欠失する。遺構は、土砂採取の断面から確認できた。全体の $\frac{2}{5}$ 程を欠失する。南側の遺存部から推察し主軸をN-60°-Wに置きかなり西に振れる。南側の壁面で東西4.9m程を測り同規模前後の方形プランを呈する遺構と推察される。掘込みは70cmと深く、遺存状態は良い。床面は、ほぼ平坦に移行繋りは弱い。周溝は、U字状で浅く、幅狭で巡る。

柱穴は、3ヶ所確認されたがP5も3の補助柱か、いずれも径30cm程で円形。掘込みは、P2が60cm、P4が70cmと円筒状で深い。

覆土は、9層に分類され黒色、黒褐色、褐色、明褐色のレンズ状の自然埋積である。一部投げ込み状ブロックの層も見られた。縫りは全体にややある。



第4図 第1号住居跡・出土遺物実測図

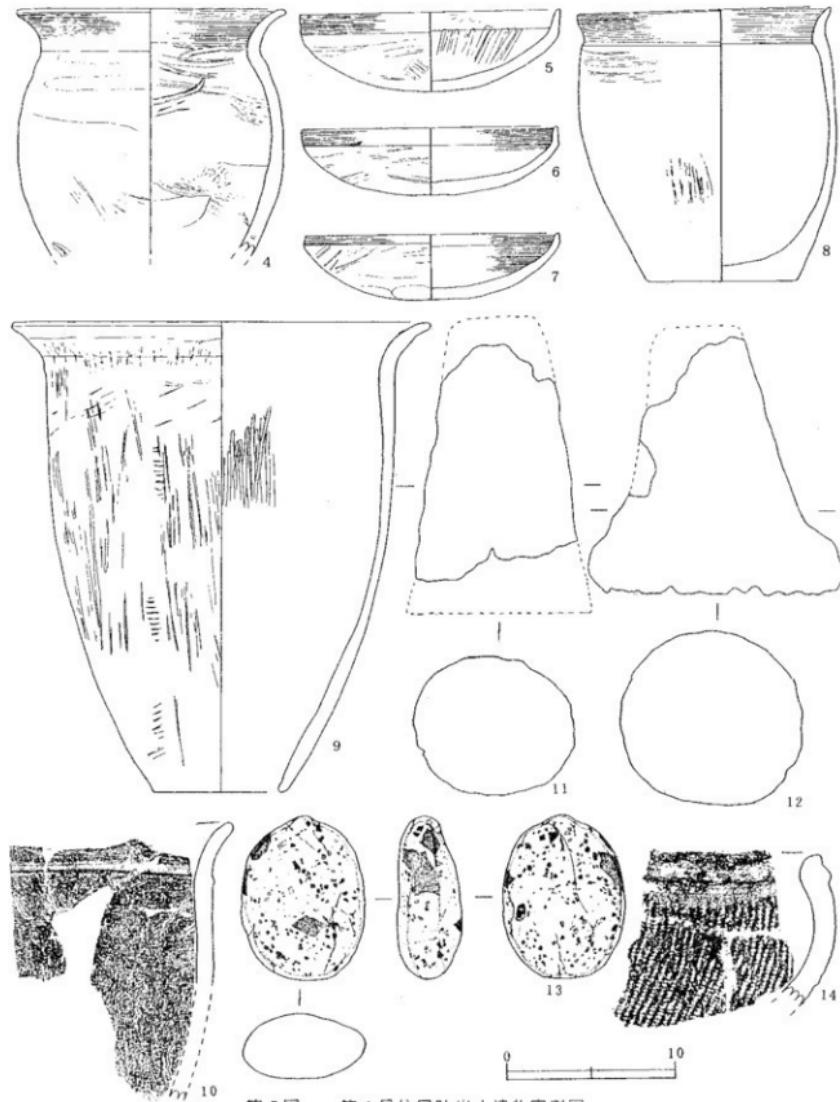
甌は、西壁に存在したか？砂質粘土等甌に関するものは支脚が出土している。

遺物は、いずれも細片で復元により器形の窺えるものが8点程あり図示した。甌は、長胴形で、口縁部は水平に近く外反、口唇部は尖り気味、胴部は幅の狭いヘラケズリ。小型の甌も同様の器形。坏は、半球形のものが検出された。口縁部のやや長めのものと短く直立するものが有り、後者7は皿に近い器形。口唇部は三角形状態。鉢型土器は、安定した平底から直線的に立ち上がり頸部で僅かにくびれる。いずれも口縁部は、横ナデ調整。9の瓶は、長胴形、口縁部水平に近い。土製支脚は、三角形形態で土器とはやや差が見られる。その他13の打製石器、14の繩文土器は、加曾利E式の口縁部が見られた。

総じて本時期のセット、一式の土器が見られた。完形土器はない。全て投げ込み状の出土状態で遺構の時期は、遺物よりやや古い時期か。鬼高I式後半か。

出土土器観察表(第4・5回)

番号	器種	法量(cm)				器形の特徴	整形技法	胎土・施成・色調	備考
		口径	肩径	底径	高さ				
1	甌 土師器	25.0	25.6	8.4	32.4	長胴形でいびつ、口唇部尖る。 覆土中、細片で出土	ヘラケズリ ナデ	細石、長石 青母 暗い灰褐色	30 %
2	甌 土師器	16.8	25.0	-	-	球形洞形態 口頸部くの字状	ナデ	細石、長石、青母 淡い黄褐色	10 % 床直
3	甌 土師器	-	24.2	10.0	-	安定した平底、球形状器形？	ナデ ヘラケズリ	細片、長石、青母 普通 淡い茶褐色	10 %
4	甌 土師器	16.0	15.8	-	-	長胴形で口縁部はよわく、「く」の字状に外反、口唇部丸く収める。	ナデ ヘラケズリ	細石、長石 暗褐色	15 % 覆土中
5	坏	15.5	15.4	4.6	4.7	半球形で口縁部は長めで、直立、口唇部は丸く収める。	横ナデ ナデ ヘラケズリ	細石、長石、砂 外-暗褐色、内-褐色	85 % 覆土中
6	坏	15.2	15.3	4.0	3.9	半球形で口縁部は直立し、口唇部丸く収める。 5に比べやや浅い。	横ナデ ナデ	細石、長石 にぶい黄褐色、一部黒色	90 % 覆土中、細片で出土
7	坏	15.2	15.1	4.0	3.8	半球形で口縁部は短く直立。	横ナデ ナデ	細石、長石、砂 にぶい暗褐色	50 % 覆土中、細片で出土
8	甌 土師器	15.0	15.2	9.0	16.0	安定した平底が立ち上がり跡に近い。 頸部弱く、くびれ、口縁部外傾	横ナデ ナデ	長石、青母、細石 淡い赤褐色	70 % 各区出土 覆土中
9	瓶 土師器	24.9	20.7	7.8	28.0	長胴形で口縁部は外反、丸く収める。 底の孔部は尖り気味	ナデ ヘラケズリ	細石、砂、長石 外-褐色、内-淡い赤褐色	30 % 覆土中、細片で出土
10	瓶 土師器					長胴形の瓶？ 頸部、ナデで稜状の尖部をもつ	横ナデ ヘラケズリ	細石、長石、青母 黄褐色	10 % 覆土中、細片で出土
11	支脚				*	三角形状、上部欠失し不明 かなり、欠失部多し			40 % 覆土中、土製
12	支脚					三角形状か？ 大半を欠失	ナデ		40 % 覆土中



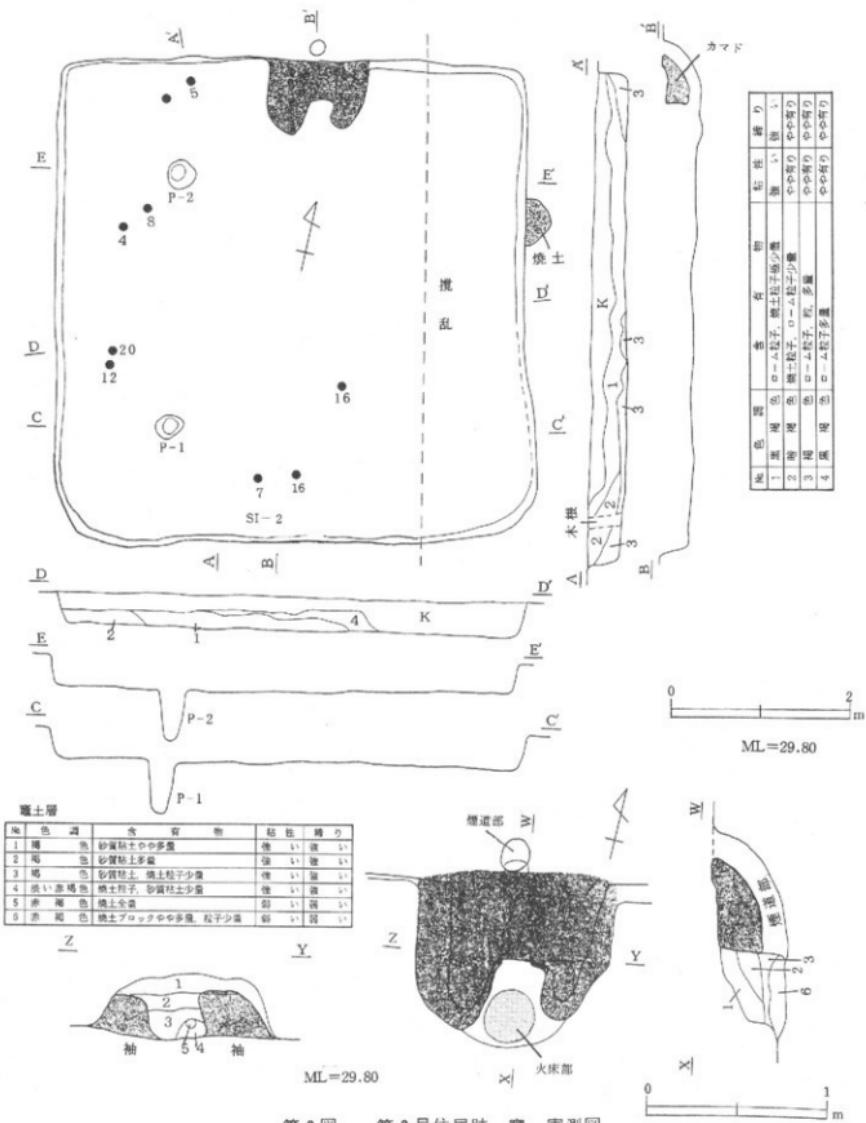
第5図 第1号住居跡出土遺物実測図

第2号住居跡（第6図、7図、図版1—5）

本跡は、1号住居跡の西南7mに位置し検出された。主軸をN—13°—Wに置き東西南北5.4m程の方形プランを呈する。掘込みは、40cm前後とやや浅く東壁側の一部は農作業の搅乱が有り

壁面の一部、床面、柱穴は不明。遺存部の床面は、平坦に移行し縫りは悪い。柱穴は、3、4が検出され径30cm程の楕円形状プランで、深さは60cm前後を測る。

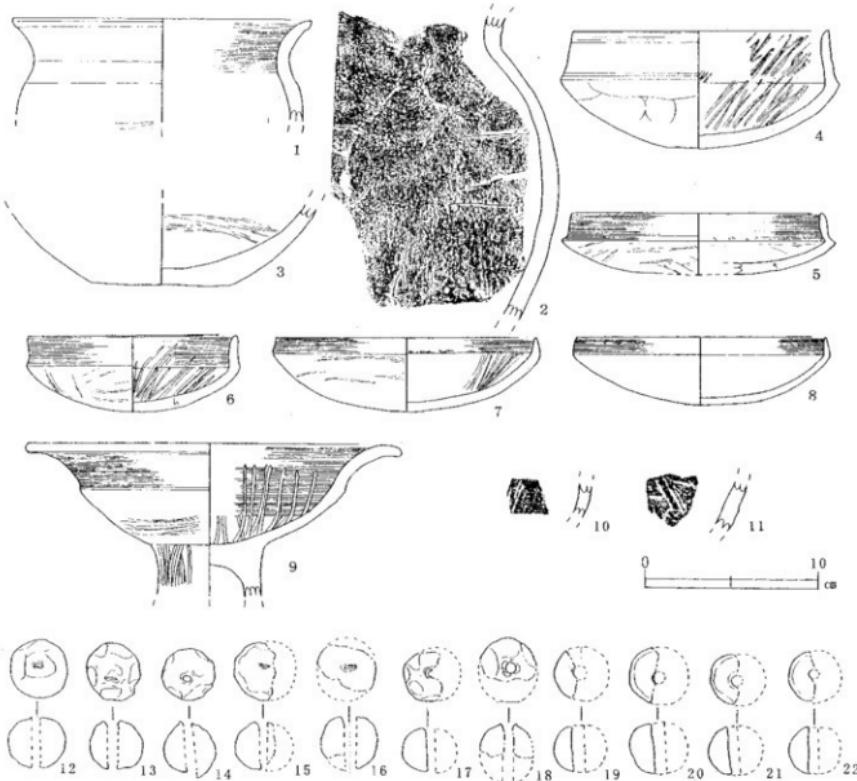
覆土は、黒褐色、暗褐色、褐色等の4層がレンズ状と、ブロック状の投げ込み的に見られた。一部に焼土が混入していた。縫り、粘性はややある。



第6図 第2号住居跡、竈、実測図

竈は、北壁中央部に位置し天井部は生きており外部に円筒状の煙道が認められた。袖はコの字状に30cm程伸び前面に火床部が円形に位置していた。用材は、全て砂質粘土であった。

遺物は、西側から散在して出土している。完形品ではなく、いずれも細片であり移動時廃棄されたものと推察される。小型の甕、球状形態と思われる甕底部、長胴形甕と推察されるものなどが見られる。杯は、4の大型のものが見られ口縁部は長く、直立気味。その他、5の皿に近いものや6の小型で口縁部外反気味のもの、半球形状の7、8などとバラエティーに富んでいる。9は、やや古い高杯で脚部を欠失している。杯部はナデ調整、内面は粗いヘラケズリ、口縁部横ナデ調整。遺物からは、鬼高Ⅲ式の時期が推定される。その他、上製の丸玉が10点程出土している。本遺跡では唯一の例である。その他、縄文前期の浮島式の小破片が出土している。平行沈線が施文されている。



第7図 第2号住居跡出土遺物実測図

第3号住居跡（第2図）

本跡は、一次調査で住居跡とされたもので今回の調査では、明確なプラン、柱穴、そして掘込みが認められなかった。が白線の中には、住居跡と思われる感じが推察されたので一応3号

出土土器観察表(第7図)

番号	器種	法量(cm)				器形の特徴	整形技法	胎土・焼成・色調	備考
		口径	刷径	底径	高さ				
1	甕 土師器	17.4	16.5			最大位を刷上位に置く 小形カメで頸部は「く」 の字状	横ナデ ナデ	長石、細石、雲母、砂 淡い赤褐色、内-灰褐色	10 % 床直
2	甕 土師器					口-や長脣形気味の 器形か。 胴-カマド中から出土 (細片)	横ナデ ナデ	細石、長石、雲母	10 % 窯中
3	甕 土師器			8.0		安定した平底で、球形 刷か。 大型のカメか。	ヘラケズリ 横ナデ ナデ	細片、雲母	10 % 覆土中
4	坏	14.8	16.2	3.0	6.7	大きく深い器形で、坏 は深く、口縁部は長く 内傾	横ナデ ヘラケズリ、 ナデ (内面 ヘラミガキ)	雲母、長石、細石 黒褐色、内-灰褐色	60 % 覆土中
5	坏	14.7	15.8		3.5	坏部は浅く、口縁部は 長く内傾	横ナデ ナデ ヘラケズリ	長石、雲母、細石 黒褐色、内-灰褐色	40 % 床直
6	坏	12.2	12.4	3.0	4.4	小型でやや深めの体部。 口縁部は直立し長め	横ナデ ナデ (内面 ヘラミガキ)	長石、細石、雲母	80 % 覆土中、細片で出土
7	坏	15.2	15.4	4.0	4.2	半球形で口縁は短く、 直立。口唇部尖る。	横ナデ ナデ	細石、長石 灰褐色	30 % 覆土中
8	坏	14.8	14.9	4.0	3.8	半球状で、器肉うすく 口縁部は直立し長め	横ナデ ナデ	細石、長石 暗褐色	70 % 床直
9	高坏	21.8				坏部は深く、口縁部水 平に近く開く。 口縁部肥厚、脚部欠失	横ナデ ナデ ヘラミガキ	長石、砂(精選)	15 % 覆土中

出土土製品一覧表(第7図)

番号	器種	法量(cm)			重量(g)	材質	出土地点	備考	
		最大長	最大幅	最大厚					
12	土製丸玉	2.9	3.3	0.4	33	土 製	覆土中		98 %
13	土製丸玉	2.8	3.1	0.6	27	"	覆土中		97 %
14	土製丸玉	3.1	3.0	0.4	26	"	覆土中		99 %
15	土製丸玉	2.8	—	0.5	20	"	カマド	$\frac{1}{2}$ 欠失	50 %
16	土製丸玉	—	—	0.6	20	"	覆土中		20 %
17	土製丸玉	2.5	—	—	14	"	覆土中		14 %
18	土製丸玉	—	—	0.6	12	"	覆土中		40 %
19	土製丸玉	—	—	—	10	"	カマド		30 %
20	土製丸玉	—	—	—	15	"	覆土中	$\frac{1}{2}$ 欠失	50 %
21	土製丸玉	2.8	—	—	10	"	カマド	$\frac{1}{2}$ 欠失	50 %
22	土製丸玉	2.9	—	—	9	"	カマド	$\frac{1}{2}$ 欠失	50 %

(2号住)

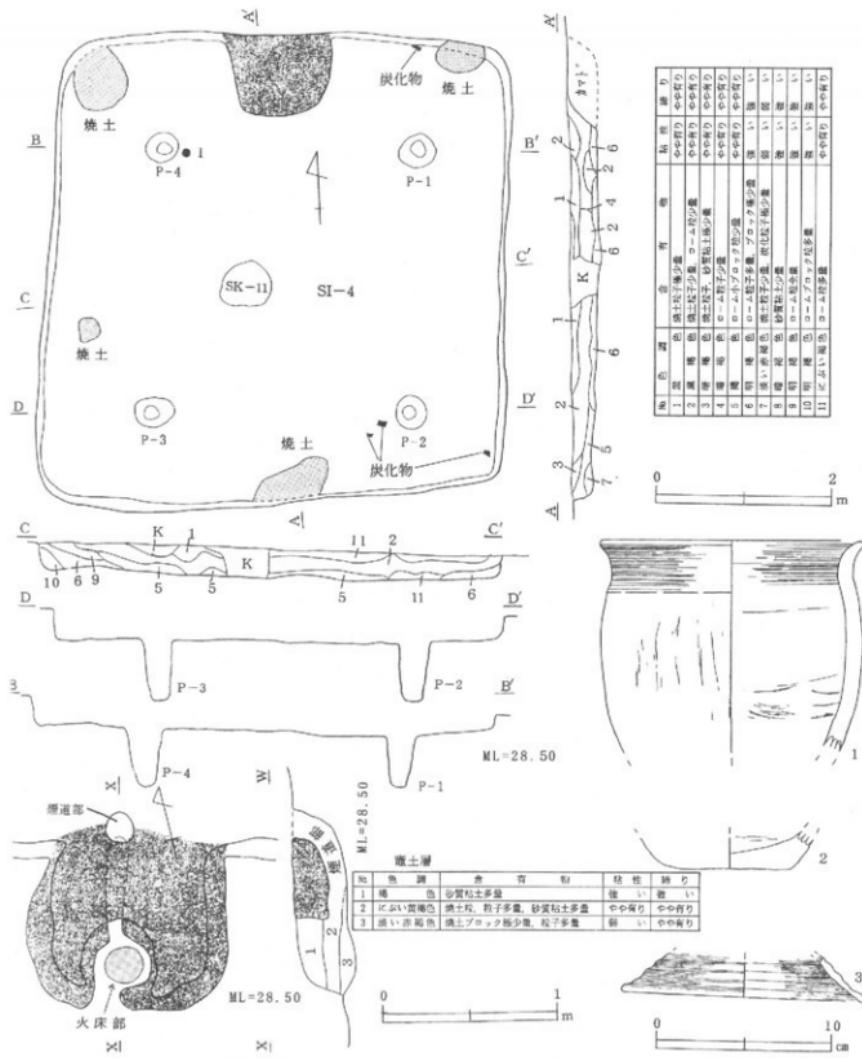
住居跡とした。

遺物は、土師器が破片が10点程遺構確認時出土している。

時期等は不明。

第4号住居跡（第8図、図版1-7）

本跡は、調査区の南側、町道近くの東側にゆるく傾斜を示す部分からで確認トレントにかかり拡幅し調査を行なった。主軸をN-8°-Eに置き東西5.4m、南北5.1m程の方形状プランを呈する。掘込みは、30cm前後と浅い。これは傾斜面の為欠失したと推察される。床面は、やや締りをもち竈前面はとくに締りを持つ。床面には若干の焼土、炭化材が検出され、廃屋後焼却処分したと推察される。周溝は確認出来なかった。



第8図 第4号住居跡、竈、出土遺物実測図

柱穴は、4ヶ所確認され径30cm前後の円形で、掘込みは4本とも70cm前後と深い。いずれも円筒形形態。

覆土は、11層に分類された。色調は、黒色、黒褐色、暗褐色、褐色、明褐色、淡い赤褐色等で高い西側からの流れこみ状の自然堆積が見られた。粘性、締りはやや有る。

竈は、北壁中央部に位置し天井部は生きており外部に煙道が検出された。袖部は、右側が火床部を抱え込む様に内傾している。用材は全て砂質粘土を用いていた。

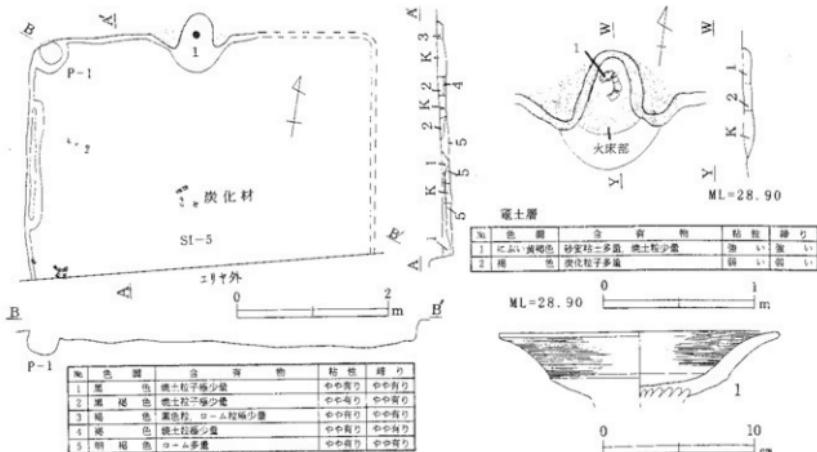
遺物は、少なく小型瓶が2点程出土している。3は須恵器高環の脚部である。本遺跡で一次、二次調査を通じ唯一の須恵器である。

出土土器観察表(第8図)

番号	器種	法量(cm)				器形の特徴	整形技法	胎土・焼成・色調	備考
		口径	胴径	底径	高さ				
1 甕 土師器		15.2	15.1			長胴形状の小型カメ口頭部弱く脇、鉢状に近い。	ヘラケズリナデ	細石、長石、雲母 暗い茶褐色	20% 覆土中
2 甕 土師器				7.0		小型のカメ底部か。	ナデ	細石多量、長石 赤褐色	5% カマド中
3 高环 須恵器				14.0		高环脚部片。	ロクロ成形か。	細石、長石、雲母 灰褐色	5% 覆土中

第5号住居跡 (第9図、図版1-8)

本跡は、調査区の南側、隣地との境界4号住居跡の南10mに位置する。本跡も東側に傾斜地に占地している為、約 $\frac{1}{5}$ を欠失、隣地との関係で $\frac{1}{5}$ を欠失している。調査によって確認出来た部分は約 $\frac{2}{5}$ 前後である。確認出来た部分から推察して東西4.5m前後の方形プランの造構



第9図 第5号住居跡、竈、出土遺物実測図

で、主軸を N - 10° - W に置くと推察される。掘込みは、西側部分で 10cm 前後。床面は、やや凹凸はあるがほぼ平坦に移行し縁りは、竈前面部に見られた。炭化材が中央部、壁面より出土している。本跡も部材抜き取り後焼却か？。

覆土は、5 層に分類され黒色、黒褐色、褐色、明褐色等である。4 層は焼土粒を極少量含む。粘性、縁りはやや有る。

竈は、北壁に位置し検出された。本時期特有の外部へ「U」字状に掘込み、取って付けた様な袖が見られる。明確な火床部は確認出来なかった。

遺物は、総数 30 片前後と少なく僅かに竈内部から支脚として転用された高杯が壊部を下にしている。長めの口縁部は水平に近く外反する。本跡の一時期前の器形である。

これら住居跡プラン、竈形態等から真間期の遺構と推察される。

本跡迄が町道西側の遺構であり、分布は散在的 1、2 は一次調査で検出された住居跡群の端部が推察される。そして東側斜面部に検出された 4、5 号は、これから述べる 6 号住居跡からの一群が推察される。

出土土器観察表（第 9 図）

番号	器種	法量 (cm)			器形の特徴	整形技法	胎土・焼成・色調	備考
		口径	胴径	底径				
1	高杯	18.6			壊部の浅い器形で体部は長く、口縁は水平に近く開き、口唇部は丸く収める。カマド中より出土。	ナデ 横ナデ	長石、矽石、雲母	壊 40 % カマド中

6 号住居跡（第 10 図、図版 2-4）

本跡からは、東側に緩やかな傾斜を示す部分に占地する遺構群で有る。6 号住居跡は町道の角部、調査区の西北に位置して検出された遺構である。主軸を N - 5° - E に置き一辺 5.6 m 程の方形プランを呈する。掘込みは、西側で 35cm 前後、東側では 5 ~ 10cm と浅い。遺存状態はあまり良くない。床面は、ほぼ平坦に移行し縁りは、やや弱い。周溝は、検出出来なかった。

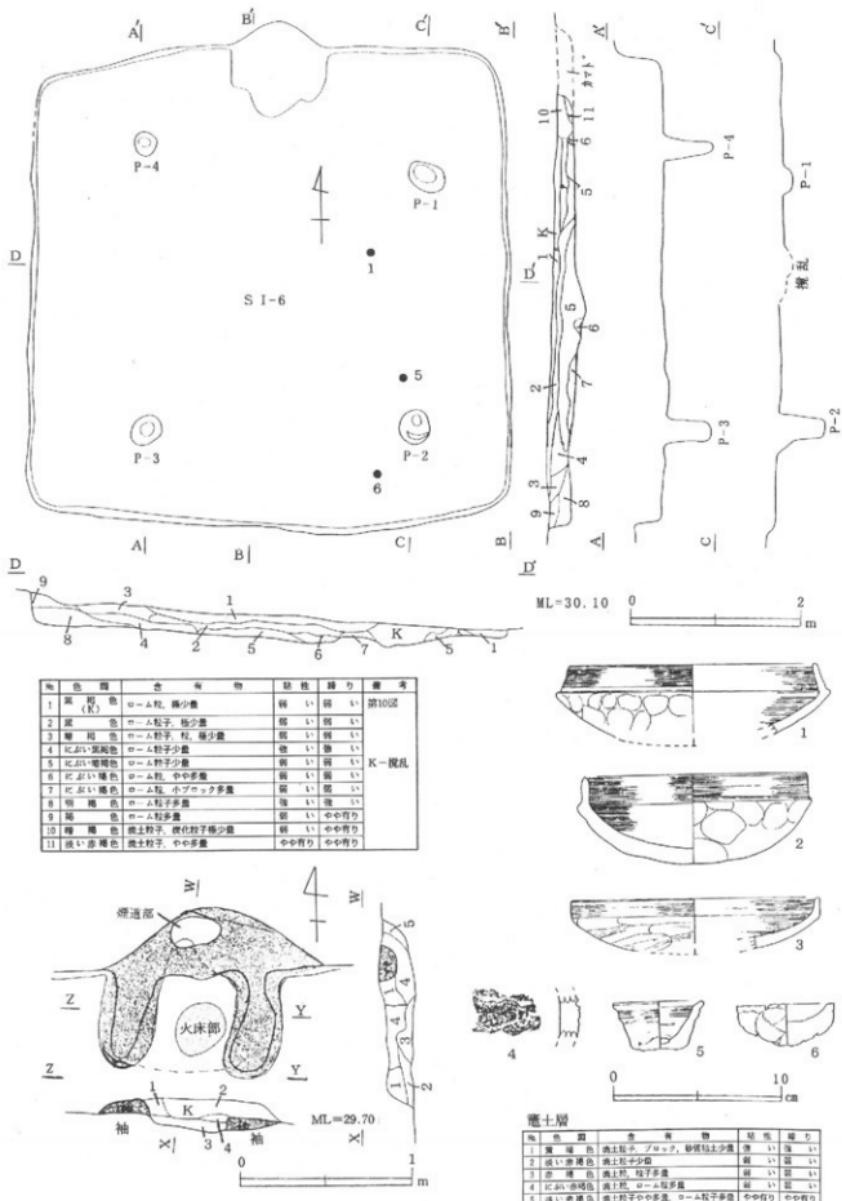
柱穴は、4 ケ所認められた。いずれも円形プランで 30 ~ 40cm で深さは、50 ~ 60cm を測るが P 1 は 10cm と浅く疑問？。いずれも円筒形形態。

覆土は、11 層に分類され黒褐色、黒色、暗褐色、鈍い褐色、明褐色、褐色、淡い赤褐色等で 11 層は、焼土粒子が見られる。縁り、粘性は弱い。層序、色調から一部投げ込み、上部は自然埋積か？。

竈は、北壁中央部に位置し検出された。遺存状態はあまり良くないが一部天井部が遺存し袖部は、直線的に 1.1 m 程伸び中央部に火床部が楕円状に位置する。用材は全て砂質粘土である。

遺物は、いずれも細片で特別な偏在はない。須恵器模倣化に出現した 1 は、肩部から強く内傾した口縁部を持つ。2 は、直立し口唇部は、尖る。3 は皿状に近い。5、6 は手捏土器で鉢状、皿等状とが有る。指頭調整の粗雑な作り。4 は、繩文土器。

出土土器、遺構形態から古墳時代後半鬼高Ⅱ期が推察される。



第10図 6号住居跡、竪、出土遺物実測図

出土土器観察表(第10図)

番号	器種	法量(cm)				器形の特徴	整形技法	胎土・焼成・色調	備考
		口径	胴径	底径	高さ				
1	壺 土師器	16.0	16.1			器肉の薄い器形で、口縁部は内傾長め	横ナデ ナデ ヘラケズリ	雲母、長石、細石	20 % 覆土中
2	壺 土師器	13.2	13.7	3.0	5.2	小型でやや深めの肩部と口縁部は直立し尖る。肩部は弱い。	横ナデ ヘラケズリ	砂、長石、雲母	90 % 床直
3	壺 土師器	12.6	14.6			半球形状で皿に近い。	横ナデ ヘラケズリ	砂、長石、雲母 黒褐色、内-黄橙色	20 % 覆土中
5	手程 土師器	5.4		3.4	2.8	鉢状器形、手捏	指頭押え、 ナデ	長石、雲母 黒色	60 % 覆土中
6	手程 土師器	5.8	5.6	1.0	2.4	皿状器形	指頭押え、 ナデ	長石、雲母 暗褐色	60 % 覆土中

第7号住居跡 (第11図、12図、図版2-5、6)

本跡は、6号住居跡の南側23mに位置し主軸をN-28°-Wに置き、一辺4.1mの方形プランを呈する。やや小型の遺構である。掘込みは、西側で40cm、東側で30cmを測る。床面は、ほぼ平坦に移行し締りはややある。周溝は検出出来なかった。

柱穴は、4ヶ所検出され、不整形で長円形状プラン。長径30~50cmで掘込みは40~60cmを測る。統一性はない。

覆土は、7層に分類され色調は黒色、黒褐色、暗褐色、褐色、明褐色等が観察された。層序からは自然埋積が肯定される。締り、粘性は弱い。

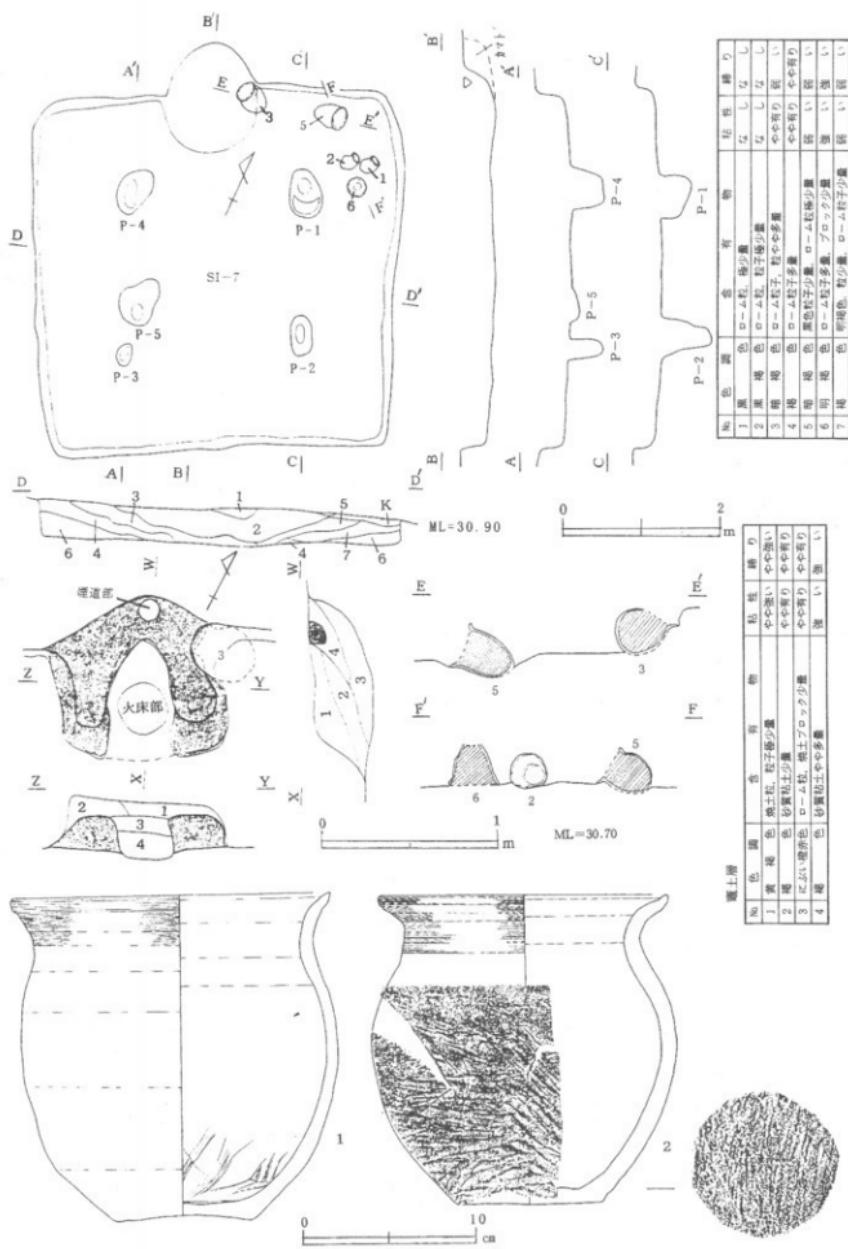
竈は、一部天井部が残り煙道部は円形状、袖部は直線的に1.3m程度伸び火床部は、U字状の中に円形に見られた層序は単純に埋積している。

遺物は、竈東側から集中して出土した。いわば使用状態のまま埋積した感じであった。いわば古墳時代の生活が出現した感じだろうか。甕が竈袖部に寄り掛かり、甕が東側に横になり、その前には小型瓶が横に2点、隣にも小型の甕が口縁部を下にした状態で立つ。各土器とも長胴形、甕は小型の三角形状が見られた。口唇部は尖り気味。

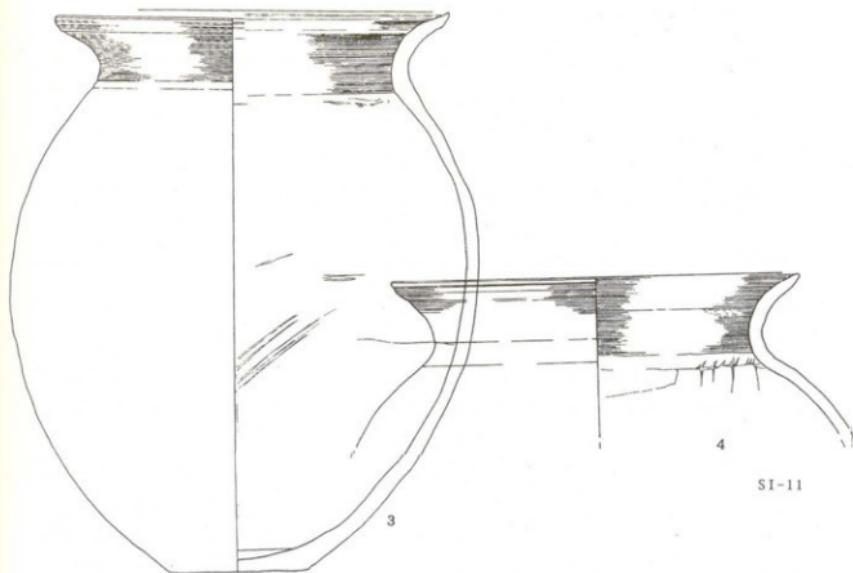
住居跡プラン、竈、出土遺物の特徴等から鬼高Ⅱ式の時期が推察される。

出土土器観察表(第11・12図)

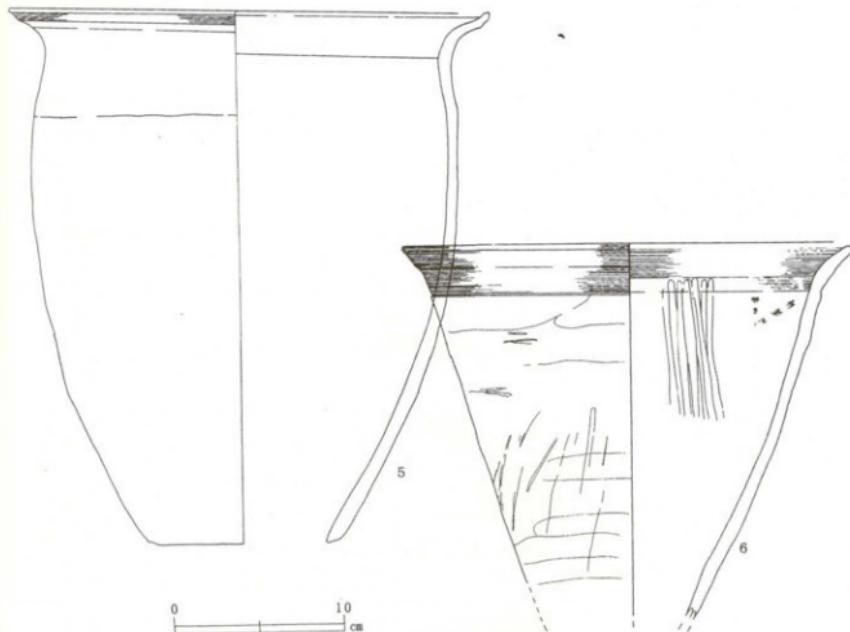
番号	器種	法量(cm)				器形の特徴	整形技法	胎土・焼成・色調	備考
		口径	胴径	底径	高さ				
1	甕 土師器	18.4	16.9	8.0	18.2	安定した上底状。 刷の張りは弱い。 外面欠失あり。	横ナデ ナデ	細石、長石、雲母 暗褐色	95 % 床直
2	甕 土師器	16.6	17.3	8.4	17.6	安定した平底。 球形状胴部、口縁部聞く	横ナデ ヘラケズリ	細石、長石、雲母 にぶい黄褐色	完形 床直
3	甕 土師器	23.2	27.1	10.2	32.8	長胴形器形、頸部「く」 の字状、口唇部尖る。	横ナデ ヘラケズリ ナデ	細石、長石、雲母 暗褐色	60 % 床直



第 11 図 第 7 号住居跡, 窯, 出土遺物実測図



SI-11



第12図 第7号住居跡出土遺物実測図

出土土器観察表(第12図)

番号	器種	法量(cm)				器形の特徴	整形技法	胎土・焼成・色調	備考
		口径	胴径	底径	高さ				
4	甕	21.5				「く」の字状に外反し最大径を肩上位におく。	横ナデ ナデ ヘラケズリ	粗石、長石	SI-11
5	瓶 土師器	28.0	24.9	11.4	31.0	長胴形器形、口縁部「く」の字状に開く。 孔部は三角形状。	横ナデ ナデ ヘラケズリ	雲母、細片、長石 黒褐色(一部灰褐色)	90% 床直
6	瓶 土師器	26.7				三角形状器形 口縁部は崩く外反	横ナデ ヘラケズリ ナデ	粗石、長石、雲母多量 黒褐色、一部赤褐色	95% 床直

第8号住居跡 (第13図、図版2-7)

本跡、7号住居跡の南側35mに位置し、 $\frac{2}{5}$ 程を町道の下に位置し完掘は出来なかった。主軸をN-13°—Wに置き南北4.3m程の方形プランが推察される。南、東側にゆるく傾斜を示す。掘込みは、西側で45cm前後、東側では5cm前後で欠失部分多い。遺存状態はあまり良くない。床面は、やや東に傾斜を示し繊りは弱い。周溝は確認出来なかった。

柱穴は、2ヶ所認められた。いずれも楕円形プランで径50~60cm、深さは20~40cmを測る。P2は20cmと浅い?。

覆土は、5層に分類され色調は黒褐色、暗褐色、褐色、明褐色等である。竈西側に焼土プロックが認められた。繊り、粘性はややある。層序、色調から投げ込み的である。

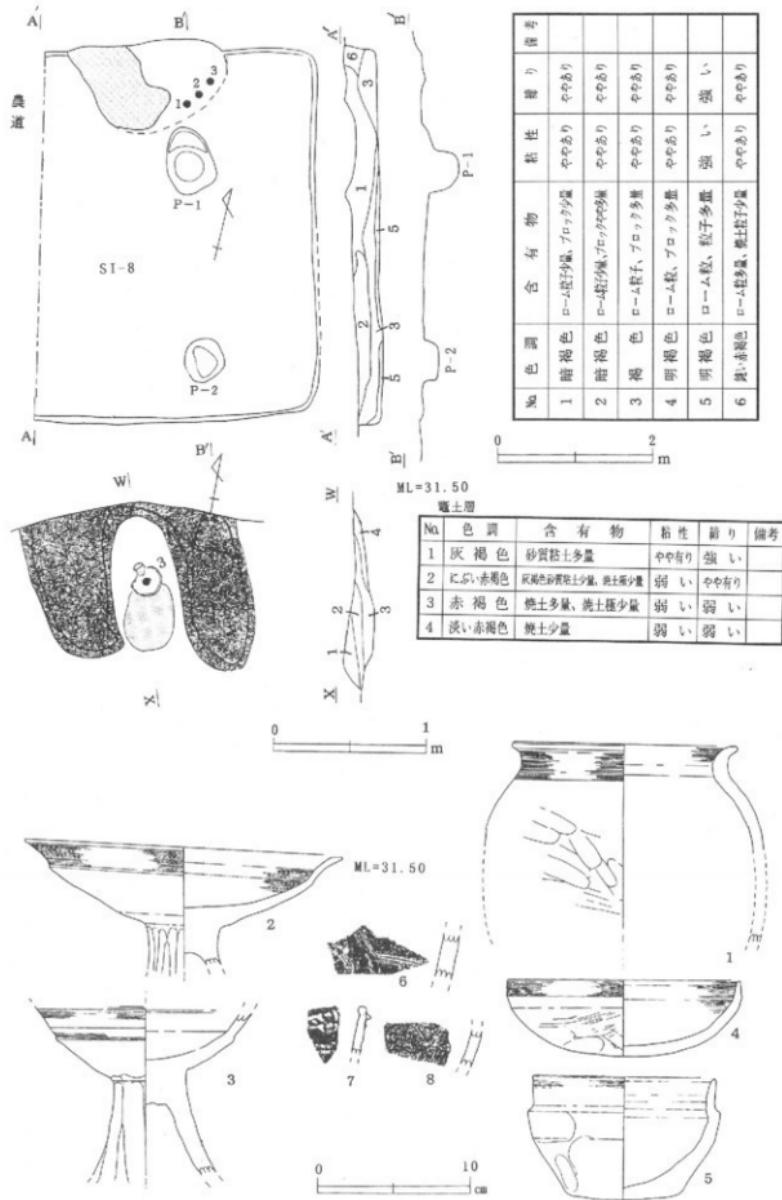
竈は、北壁に位置し検出された。遺存状態は悪く、天井部は消失し下部の砂質粘土と火床部のみであった。袖部は、直線的に右側に振れて1m程伸び、中央やや前面に火床部が位置する。火床部奥に高杯が支脚の替わりに使用されていた。(3)

遺物は、完形品ではなく細片で復元により器形の窺えるものが4点見られた。高杯は、杯部が外反し口縁部は水平に開く。甕は球形に近い胴部をもつ。半球形の杯は口縁部は直立、口唇は尖る。小型の鉢状土器は肩部に段をもち、口縁部は外傾気味で口唇は尖る。6、7、8は半裁竹管の浮島式、加曾利B式、五領式?。

本跡は住居跡プラン、竈形態、出土土器の特徴から古墳時代後半鬼高I期が推察される。

出土土器観察表(第13図)

番号	器種	法量(cm)				器形の特徴	整形技法	胎土・焼成・色調	備考
		口径	胴径	底径	高さ				
1	甕 土師器	14.8				やや膨らむ器形か。 口唇部は丸味をもつ。	横ナデ ナデ ヘラケズリ	長石、細石、雲母 黒褐色	40% 覆土中
2	高杯 土師器	20.8				杯部はやや不整形 口縁部は長めで、うすく外反。 脚部円筒状	横ナデ ナデ ヘラケズリ	細石、長石、雲母 暗褐色	50% 床直
3	高杯 土師器					杯口縁部消失 脚部端部消失。 杯と体部の間に段をもつ。	横ナデ ヘラケズリ	砂、細石、長石 黄褐色	K中 支脚 残 60%
4	杯 土師器	15.2	15.3	6.0	5.0	半球形、端に近い器形	横ナデ ナデ ヘラケズリ	長石、細石、雲母、砂 にぶい黒褐色	70% 覆土中
5	小型鉢 土師器	12.0	12.5	7.4	8.1	底部は丸みをもつ。 肩部に段をもつ口縁部は直立。	横ナデ ナデ ヘラケズリ	長石、雲母、細石 赤褐色、一部黒褐色	60% 覆土中



第13図 第8号住居跡、竈、出土遺物実測図

第9号住居跡 (第14図、図版3-8)

本跡は、8号住居跡の東南側7mに位置し検出された。主軸をN-12°-Wに置き一辺5m程の方形プランを呈する。掘込みは西側で45cm、東側は10cm程で傾斜はやや強い。床面は、ほぼ平坦に移行し縫りは竈前面のみであった。周溝は、検出されない。東側の一部に藤摩芋の貯蔵穴による擾乱が見られる。

柱穴は、4ヶ所確認されいずれも径30~55cmの梢円形状形態。掘込みは40~50cmで円筒形状。やや不規則な形態と掘り方である。

覆土は、6層に分類された。色調は黒色、黒褐色、暗褐色、明褐色等で粘性、縫りはやや弱い。

竈は、北壁中央部に位置し検出された。天井部は良好に残り、煙道部は円形で外部に位置する。袖部は、短く70cm程直線的にのびる。中央部に梢円形状の火床部が位置する。用材はすべて砂質粘土を用いている。

遺物は、南側の壁面近くに壊が散在して出土している。口縁部が長めで内傾するものと直立するもの、半球形のものがみられる。4は、粗いヘラケズリが見られる。6は称名寺式の胴部と推察される。

本跡は、造構プラン、竈、出土遺物から鬼高Ⅱ式の時期が推察される。

出土土器観察表(第14図)

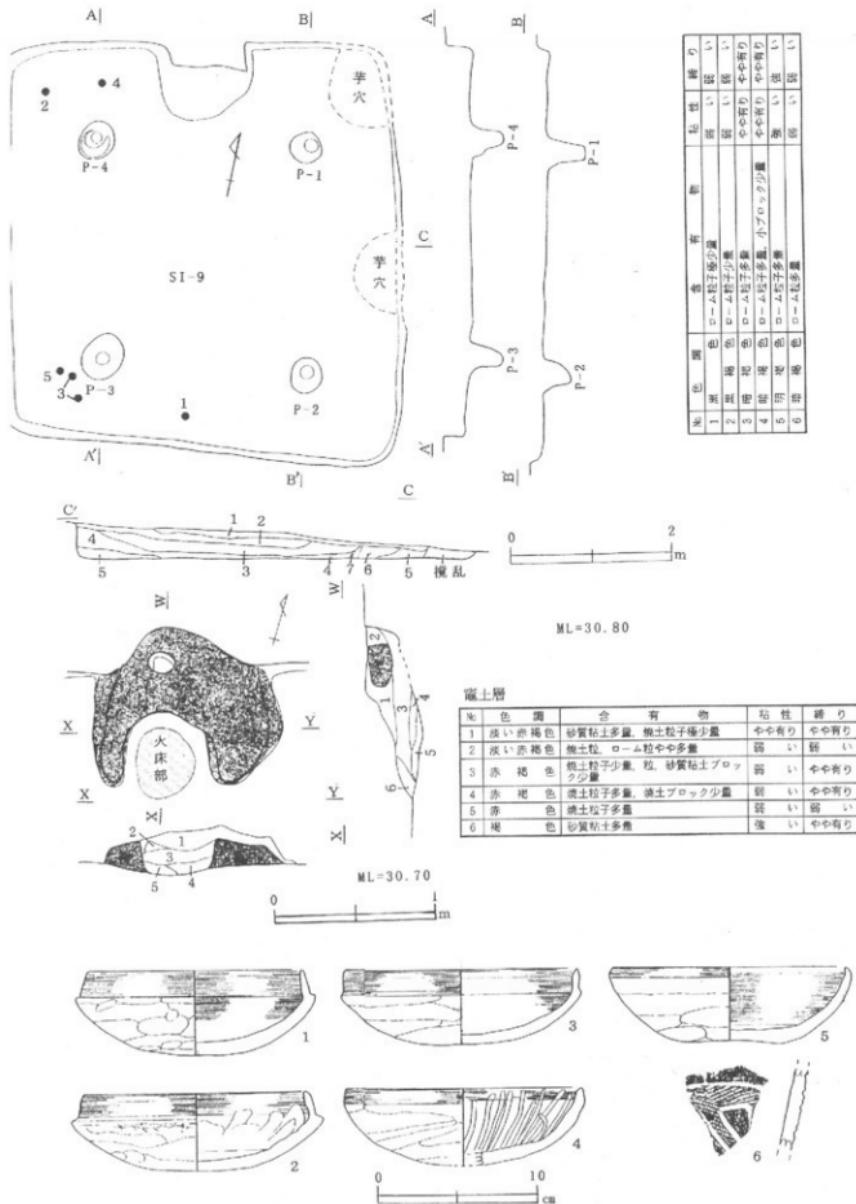
番号	器種	法量(cm)				器形の特徴	整形技法	胎土・焼成・色調	備考
		口径	胴径	底径	高さ				
1 土師器	壺	13.2	14.9	5.8		肩部はやや深い。 口縁部長めて内傾。	横ナデ ナデ ヘラケズリ	精選(雲母) 暗褐色(黄橙色)	80% 覆土中
2 土師器	壺	12.8	15.7	5.8	4.6	肩部は明確。 口縁部は内傾、口唇部は丸く収める。	横ナデ ナデ	精選、長石 暗褐色	60% 覆土中
3 土師器	壺	14.6	14.9	4.8	4.5	平底気味で口縁部は直立し、口唇部は尖る。	横ナデ ナデ ヘラケズリ	精選(雲母) 暗褐色(灰褐色)	70% 覆土中
4 土師器	壺	14.7	14.8		4.7	半球形状で口唇部は丸く収める。	横ナデ ヘラケズリ ヘラミガキ	精選(雲母) 淡い橙色	60% 覆土中
5 土師器	壺	14.7	15.1	6.4	4.4	安定した平底で短い。 口縁部は内傾。	横ナデ ナデ ヘラケズリ	精選(雲母) 暗褐色	70% 覆土中

第10号住居跡 (第15図、16図、図版3-1、2)

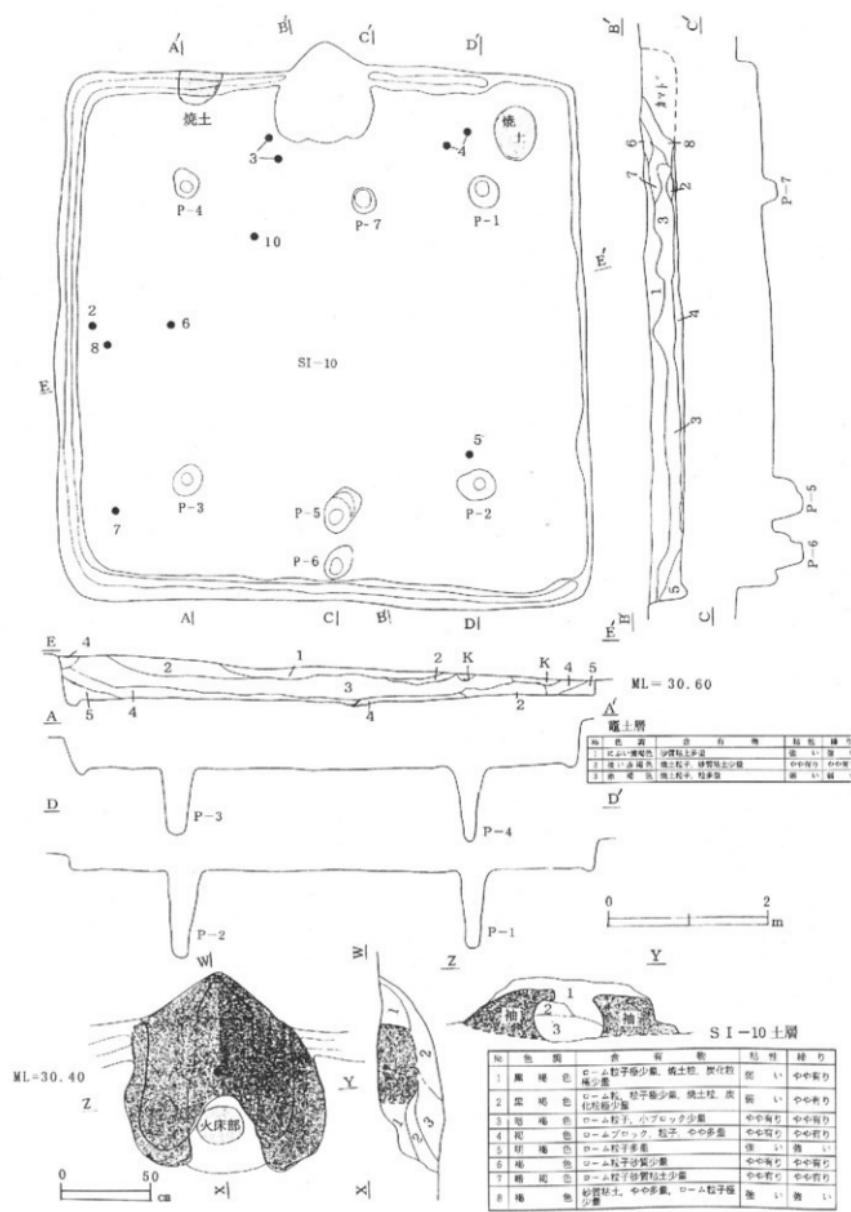
本跡は、8号住居跡の南側25m、調査区の南端に位置し主軸をN-4°-Eに置き一辺6.6m前後を測る。大型で方形プランを呈し、掘込みは、西側で60cm、東側で20cmを測る。傾斜は強い。床面は、ほぼ平坦に移行し縫りはややある。周溝は、東壁側を除き幅は狭いが検出されている。

柱穴は、7ヶ所検出され、不整形で長円形状と円形プランが見られ、径30~70cm程で、掘込みは円筒状で80~90cmと深い。P5、6、7は浅く不整形プラン。

覆土は、3層に分類され色調は鈍い黄褐色、淡い赤褐色、赤褐色等が観察された。1層は砂質粘土を含む。2層は、焼上粒子を含む。層序からは、東側に流れる自然埋積が推察される。粘性、縫りはややある。



第 14 図 第 9 号住居跡, 窟, 出土遺物実測図

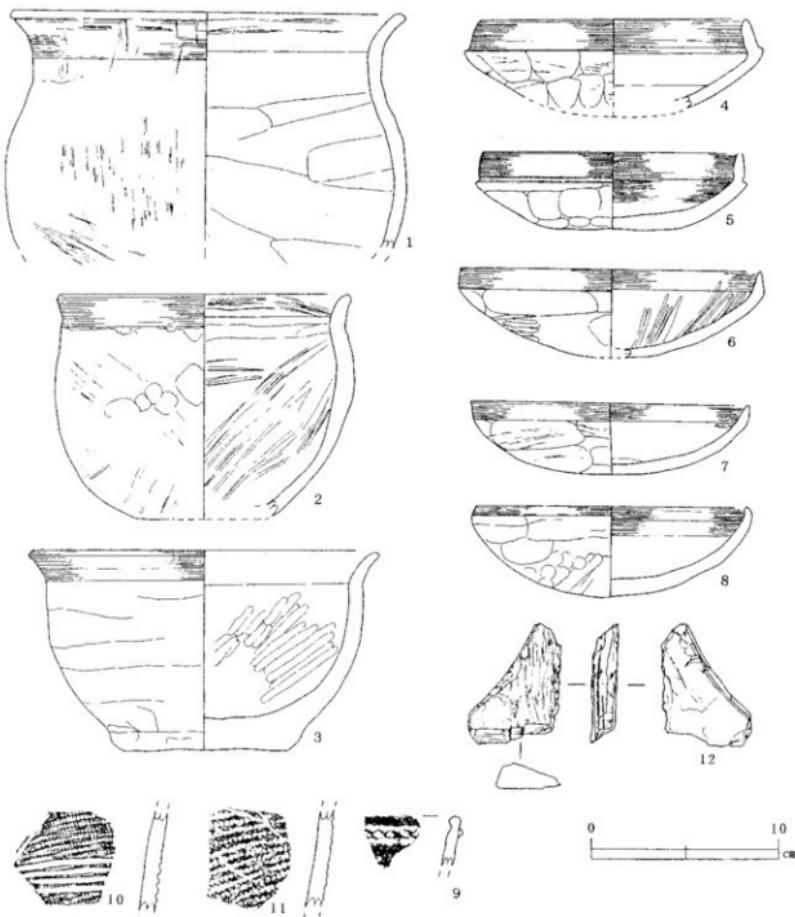


第 15 図 第 10 号住居跡、竈、実測図

竈は、天井部が遺存し煙道部は三角形状。袖部は、短く直線的に20cm程で火床部はやや奥に位置する。1の甕が煙道部から破片で出土している。(第12図4)

遺物は、竈周辺、西壁面近くに位置し検出された。小型の鉢状土器、坏が見られる。鉢は、安定した底部から直線的に立ち上がる。口縁部僅かに外反。坏は、須恵器模倣化に出現するもので口縁部は強く内傾する4と直立する5が見られる。半球形のものはやや深めのタイプ。その他石器、繩文土器片が出土している。9~11は、繩文土器で9は加曾利B式、他は胸部で破片である。

住居跡はプラン、竈、出土遺物の特徴等から鬼高Ⅱ式の時期が推察される。



第16図 第10号住居跡出土遺物実測図

出土土器観察表（第16図）

番号	器種	法量(cm)				器形の特徴	整形技法	胎土・焼成・色調	備考
		口径	胴径	底径	高さ				
1	甕 土師器	20.8	21.2			粗雑な作り長胴形状。口部は弱く括れる。	ナデ ヘラケズリ	長石、細石、雲母 にぶい黒褐色	10 % カマド中
2	甕 土師器	15.4	15.8		11.9	鉢状器形、頭部は弱く括られる。	横ナデ ヘラケズリ ナデ	長石、細石、雲母 淡い赤褐色、一部黒色	70 % +10
3	甕 土師器	18.4	16.8	8.6	10.1	鉢形で安定した平底、厚い。 頭部外反	横ナデ ナデ ヘラケズリ	細石、長石、雲母 赤褐色	60 % 床直
4	坏 土師器	14.1				口縁部は長めで内稜、口唇部丸く收める。	横ナデ ナデ ヘラケズリ	精選(雲母) 暗褐色	40 % 覆土中
5	坏 土師器	13.8	15.7	6.7	4.0	平底で直線的に立ち上がる。 肩部は明確、口縁部長め。	横ナデ ナデ ヘラケズリ	精選 褐色	40 % 覆土中
6	坏 土師器	15.8				半球形状で口縁部は短く、 口唇部は直立し尖る。	横ナデ ナデ ヘラミガキ	長石、雲母 淡い褐色	40 % 床直
7	坏 土師器	14.7	14.5	2.4	3.8	半球形でやや浅い。	横ナデ ナデ ヘラケズリ	雲母、砂 黒褐色	70 % 細片、覆土中
8	坏 土師器	14.0		3.0	4.5	半球形で碗状器形。 短い口縁部は内傾気味。 尖る。	横ナデ ナデ ヘラケズリ	精選(雲母) にぶい黒褐色	完形 + 5

石器一覧表（第16図）

番号	器種	法量(cm)			重量(g)	材質	出土地点	備考	
		最大長	最大幅	孔 最大厚					
12	砥石か				150	粘板岩?	覆土中	一部に加工あり	欠失多し

第11号住居跡（第17図、18図、図版3-3）

本跡は、10号住居跡の北側9mに位置し検出された。主軸をN-4°-Wに置き東西5.2m、南北5.7mの長方形プランを呈する。掘込みは、西壁面立ち上がりは50cm、東側では、10cmと傾斜は強い。床面は、ほぼ平坦に移行し西側、竈前面で締りを持つ。西壁面に添って浅いU字状形態の周溝が検出されている。

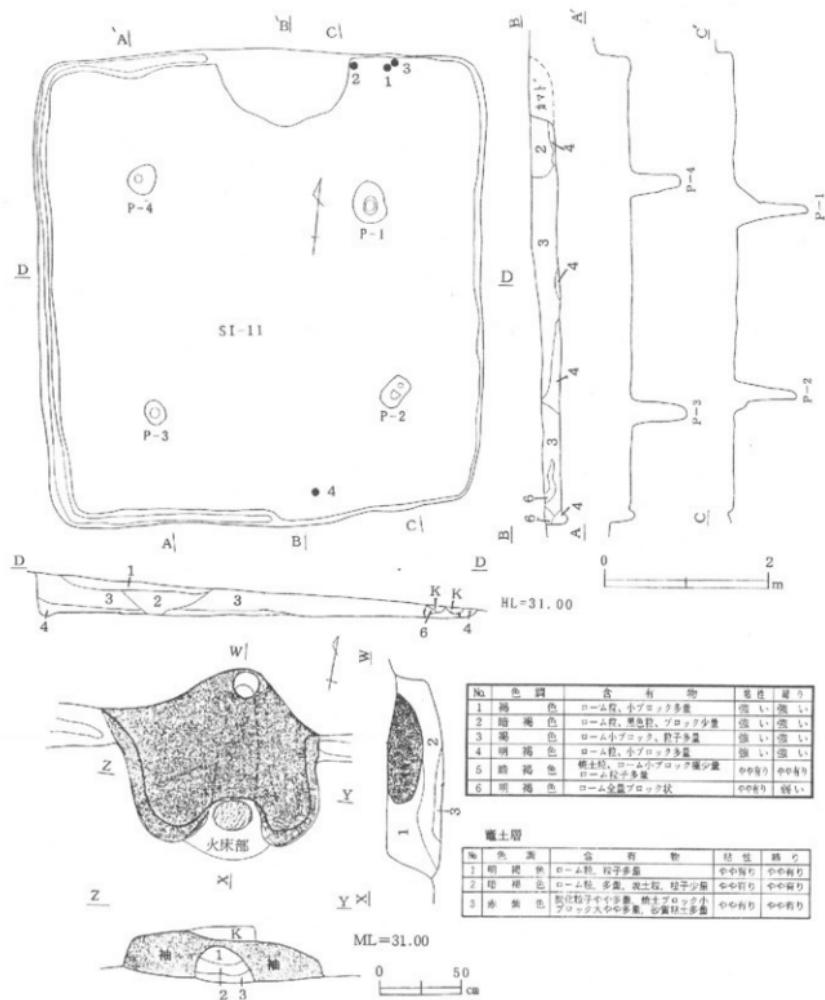
柱穴は、4ヶ所確認され、P2を除き径30~50cm程の円形、橢円形状形態で掘込み深さは70~80cm。円筒状形態。

覆土は5層に分類され色調は、褐色、暗褐色、明褐色等で層序は不規則で投げ込み状の堆積。締り、粘性はやや強い。本跡遺跡の中では例外的な層序を示す。土坑、搅乱?。自然埋積で黒色土がさも上部1層になるのが本遺跡の埋積状態である。差異が認められる。

竈は、北壁面に位置し検出され天井部は生きており煙道部は外部に円形に認められた。袖部は短く、挟まれる様に火床部が円形状に認められた。用材は全て砂質粘土を用いている。

遺物は、竈東側に1、2、3がまとめて出土している。小型甕で胴部は円形状、口縁部は、外反し口唇部は丸みをもつ。坏は、皿状で口縁部は長めで直立状形態。口唇部は同様に丸みをもつ。12図、4は、壺に近い口縁部をもち頭部はやや長め。

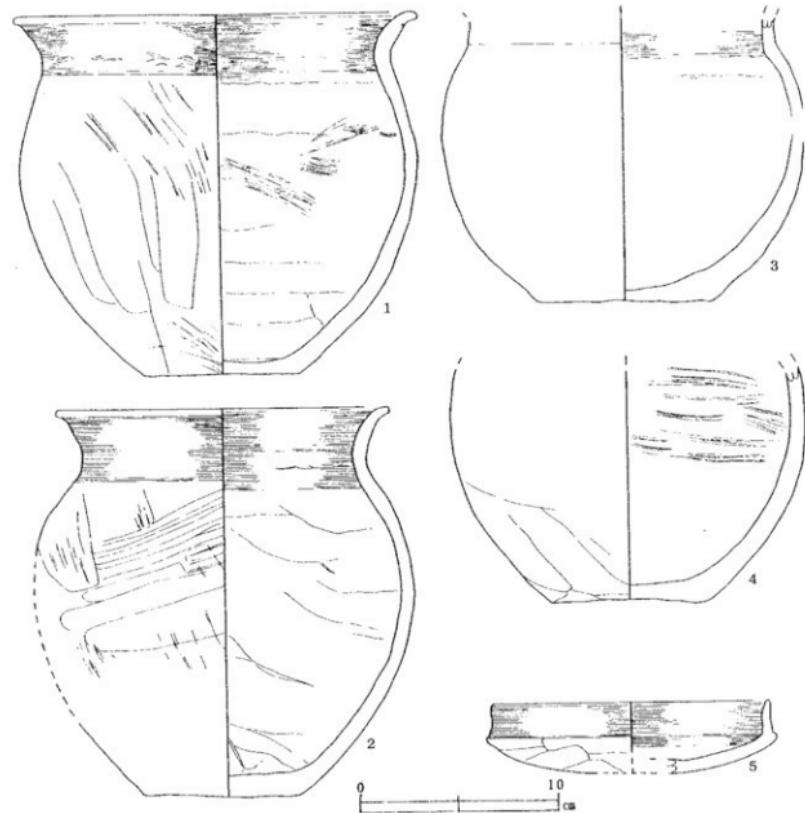
時期は住居跡プラン、竈形態、遺物の特色から鬼高Ⅰ期の末Ⅱの前半が推察される。



第17図 第11号住居跡・竈実測図

出土土器観察表(第18図)

番号	器種	法量(cm)				器形の特徴	整形技法	胎土・焼成・色調	備考
		口径	胴径	底径	高さ				
1	甕 土師器	20.5	20.5	8.0	18.5	小型カメ、やや口頃が大きい。 頸部の括れは弱い。	横ナデ ナデ ヘラケズリ	細石、雲母、長石 暗褐色(赤褐色)	50% 床直



第18図 第11号住跡出土遺物実測図

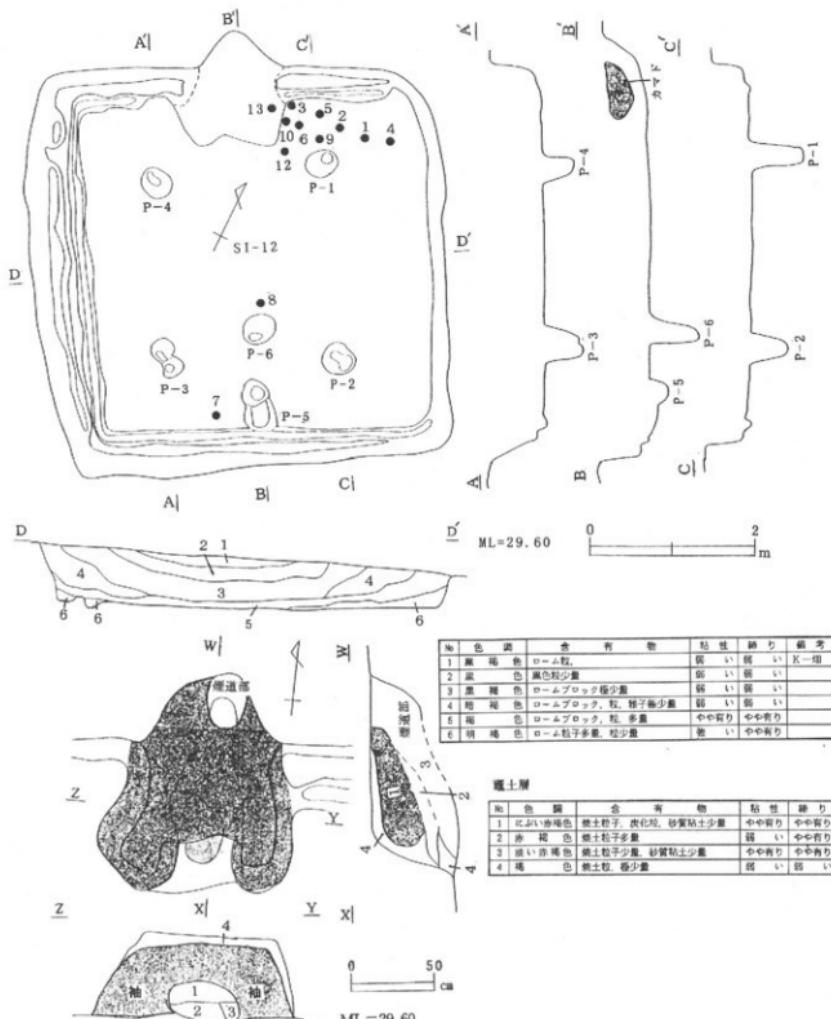
出土土器観察表(第18図)

番号	器種	法量(cm)				器形の特徴	整形技法	胎土・焼成・色調	備考
		口径	脚径	底径	高さ				
2	甕 土師器	17.0	19.5	8.0	20.0	小型カメやや球形胴。 頸部の括れは弱い。 口唇部丸味をもつ。	横ナデ ヘラケズリ ナデ	細石、長石、雲母 暗褐色、一部赤褐色	60% 床直
3	甕 土師器		18.8	9.0		小型で鉢に近い。 胴部やや張る。もろい。	横ナデ ナデ	細石、長石 にぶい赤褐色	70% 覆土中
4	甕 土師器		18.0	6.0		小型カメ、球形胴？	横ナデ ヘラケズリ ナデ	細石、長石、雲母 にぶい赤褐色	40% 床直
5	环	14.2				浅い皿状の体部で、口縁部は長く直立する。	横ナデ ナデ ヘラケズリ	長石、細石、雲母	20% 床直

第12号住居跡 (第19図、20図、21図、図版3-4)

本跡は、6号住居跡の東南側25mに位置し主軸をN-29°-Wに置き一辺4.6m前後を測る。小型で方形プランを呈し、掘込みは、西側で70cm、東側で45cmを測ると傾斜は強い。床面は、東側に10cm程傾斜し移行する。縁りはややある。周溝は、西側にU字状に二重にみられ、東側を除き認められた。本例は本跡のみである。

柱穴は、4ヶ所検出され、円形状プランで径30~40cm、掘込みは40~70cm程で円筒状。その他



第19図 第12号住居跡・竪実測図

P 5、6 南側に検出され、浅く不整形プラン。

覆土は、6層に分類され色調は黒色、黒褐色、暗褐色、褐色、明褐色等が観察された。層序はレンズ状の自然埋積を示す。粘性、繊りはややある。

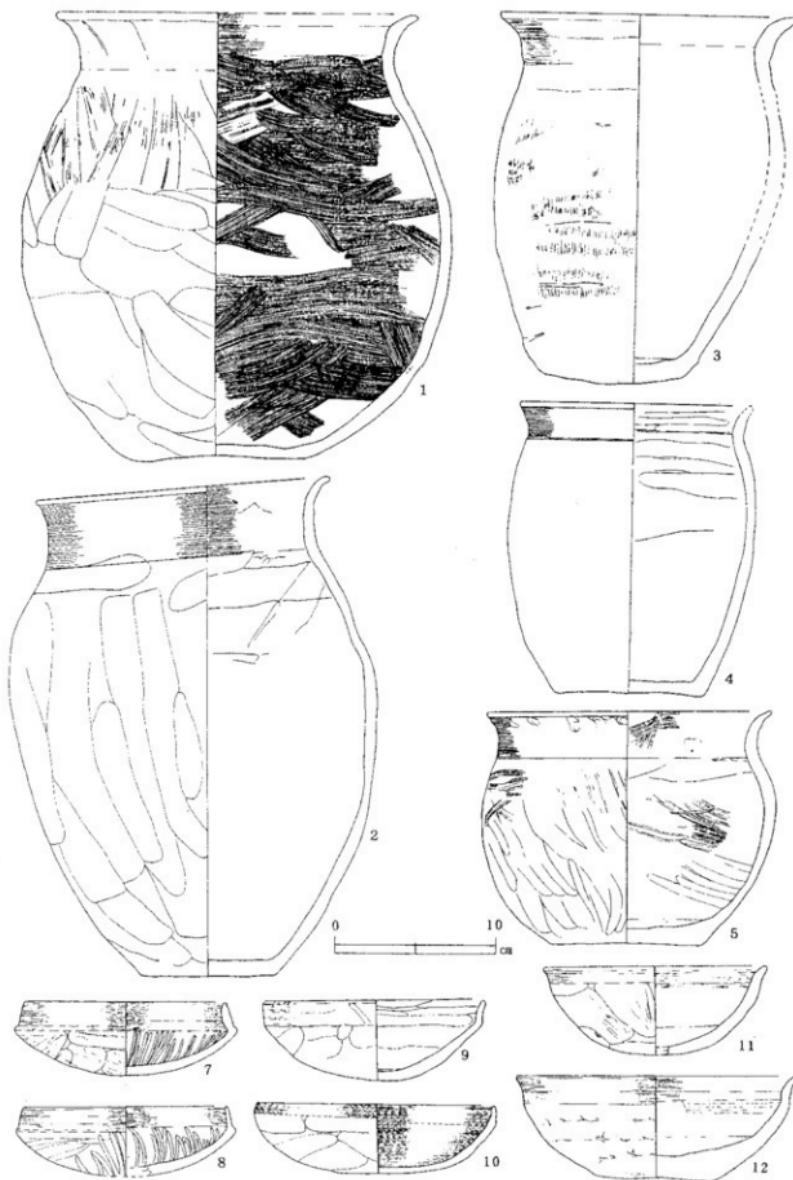
竈は、天井部が遺存し煙道部は長円形状。袖部は、短く直線的に20cm程。火床部はやや奥に位置し一部は天井部の中に入る。用材は、全て砂質粘土を用いている。

遺物は、竈周辺に使用状態の感じで位置し検出された。大型長胴形の甕は1、2、小型の3、安定した底部から直線的に立ち上がる4。杯は、口縁部が尖る7、8、13と外反気味の9、10、11や大型の碗に近い12などがある。6、14はやや古いタイプの瓶で胴上位が僅かに張る。三角形状からやや崩れている。5、15は鉢状土器で大型と小型のものが出土している。16は、上製支脚で円筒状。17は手捏土器の底部、18は石鏃である。

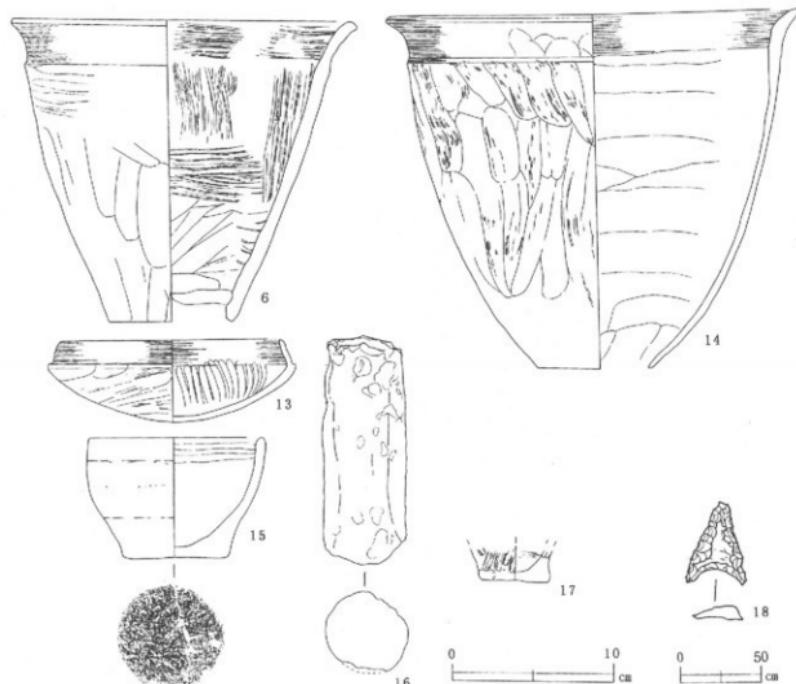
住居跡プラン、竈、出土遺物の特徴等から鬼高Ⅱ式の前半期が推察される。

出土土器観察表(第20・21図)

番号	器種	法量(cm)				器形の特徴	整形技法	胎土・焼成・色調	備考
		口径	胴径	底径	高さ				
1	甕 土師器	22.6	26.7	10.8	27.4	底部は上底状器形で最大径を胴中位に置く。 頭部「く」の字状。	横ナデ ナデ ヘラケズリ	長石、細石、雲母 灰褐色、一部黒、赤褐色	60% 床直
2	甕 土師器	18.4	22.7	8.4	32.4	長胴形器形、胴部の張り、 頭部の活れも弱い。 器内は薄い。	横ナデ ヘラケズリ	長石、細石、雲母	口縁部だ円形状 95% 床直
3	甕 土師器	18.4		9.0	22.7	不安定な底部と胴部。 長胴形、口縁部肥厚、外反。	横ナデ ヘラケズリ	細石、長石、雲母 赤褐色、一部黒褐色	60% 床直
4	甕 土師器	14.5	15.3	10.2	18.1	たこぼ状で平底から直線的に立ち上がる。活れは弱い。	横ナデ ナデ	長石、細石、雲母 にぶい黄褐色	95% 床直
5	甕 土師器	17.8	18.4	9.4	14.7	鉢状、平底から内傾して立ち上がり、頭部「く」の字状。 括れはややある。	ヘラケズリ 横ナデ ナデ	長石、細石、雲母 淡い赤褐色	60% 床直
6	瓶 土師器	21.3	18.5	7.8	18.5	三角形状で、口縁部弱く外反。	横ナデ ヘラケズリ ナデ	長石、細石、雲母 にぶい黄褐色	95% 床直
7	杯 土師器	12.6		3.0	4.6	やや小型で、口縁部は内傾し、口唇部尖り気味。	横ナデ ナデ (内面)ヘラ ミガキ	長石、雲母 にぶい橙色	70% 床直
8	杯 土師器	12.8				頭部の段は弱い。 薄い口縁部は内傾。	横ナデ ヘラケズリ	細石、長石 淡い灰褐色	40% 覆土中
9	杯 土師器	13.8		2.5	5.0	碗状で口縁部は外反。	横ナデ ナデ ヘラケズリ	細石、雲母 褐色	80% 覆土中
10	杯 土師器	14.7		5.0	4.3	平底気味で口縁部直立、 口唇部尖る。	横ナデ ナデ ヘラケズリ	精選 褐色	90% カマド中 床直
11	杯 土師器	14.0				やや深い碗状、口縁部は内傾し、口唇部尖り気味。	横ナデ ナデ (内面)ヘラ ミガキ	長石、雲母 にぶい橙色	70% 床直
12	杯 土師器	17.5		7.2	6.3	大型の杯で端に近い。安定した平底で、口縁部は1段屈曲聞く。	ナデ 横ナデ 輪積痕をのこす	長石、細石、雲母 暗褐色	90% 床直+カマド中
13	杯 須恵器	13.5		2.5	5.0	須恵器。横はうで、みられる器形。 口縁部、内傾	横ナデ ヘラケズリ ヘラミガキ	雲母、長石 褐色	90% 床直



第20図 第12号住居跡出土遺物実測図



第21図 第12号住居跡出土遺物実測図

出土土器観察表(第21図)

番号	器種	法量(cm)				器形の特徴	整形技法	胎土・焼成・色調	備考
		口径	胸径	底径	高さ				
14	瓶 土師器	25.2	22.0	7.0	22.0	やや胴が張る。 器肉は薄い。 口縁部短く外反	横ナデ ヘラケズリ	長石、細石 淡い赤褐色	99% 床直
15	鉢 土師器	11.0		6.2	7.5	安定した平底から直線的 に立上る。口唇部は丸く 取める。	横ナデ ナデ	細石、長石、雲母 にぶい暗赤褐色	完形 床直
17	鉢		5.0	4.0		底部のみ	ナデ ヘラケズリ		

土製品・石器一覧表(第21図)

番号	器種	法量(cm)			重量(g)	材質	出土地点	備考	
		最大長	最大幅	最大孔厚					
16	支脚		5.0		350	土 製	覆土中	円筒状、大部分欠失	
18	石 繩	4.3	3.8		30	々		三角形やや長め剥離は丁重	

第13号住居跡 (第22図、24図、図版3—5)

本跡は、12号住居跡の南側9mに位置し検出された。主軸をN—1°—Wに置き東西5.2m、南北5.3mの方形プランを呈する。掘込みは、西壁面立ち上がりは50cm、東側では、15cmと傾斜は強い。床面は、ほぼ平坦に移行し西側、竈前面で縦りを持つ。西壁面の一部と南側に浅いU字状形態の周溝が検出されている。

柱穴は、4ヶ所確認され、P2を除き径30~50cm程の円形、橢円形状形態で掘込こみ深さは50cm前後。P3は、より三角形プラン。

覆土は、6層に分類され色調は、黒色、黒褐色、褐色、暗褐色、明褐色等で層序はレンズ状の自然埋積。縦り、粘性はやや強い。本跡遺跡の中では一般的な覆土である。

竈は、北壁面に位置し検出され天井部は消失し、U字状プランで袖部は80cm程直線的に伸び、火袋中央部に火床部が円形状に認められた。用材は、全て砂質粘土を用いている。

遺物は、南側に1、2、3、5が出土している。1は小型甕で胴部の張りは弱い。坏は、口縁内部内傾、口唇部は丸みをもつ。その他、土製丸玉が出土している。24図1は瓶でP2内部から破片で出土している。

時期は住居跡プラン、竈形態、遺物の特色から鬼高Ⅱ期末の時期が推察される。

出土土器観察表 (第22・24図)

番号	器種	法量(cm)				器形の特徴	整形技法	胎土・焼成・色調	備考
		口径	胴径	底径	高さ				
1	甕 土師器	17.2	29.0	11.0	30.0	大型の壺状器形。 頭部は弱く、括れる。	横ナデ ナデ ヘラケズリ	長石、細石、雲母 暗い赤褐色	20% 覆土中
2	坏	14.0		3.5	4.4	やや浅めの壺体部で、口 縁部は長めで内傾。	横ナデ ヘラケズリ ヘラミガキ	精選、雲母	80% 床直
5	瓶 土師器	35.0		11.2	29.8	長胴形で口縁部水平に開 く。	横ナデ ヘラケズリ	粗石、長石、雲母 暗褐色	60% 覆土中

土製製品一覧表 (第22図)

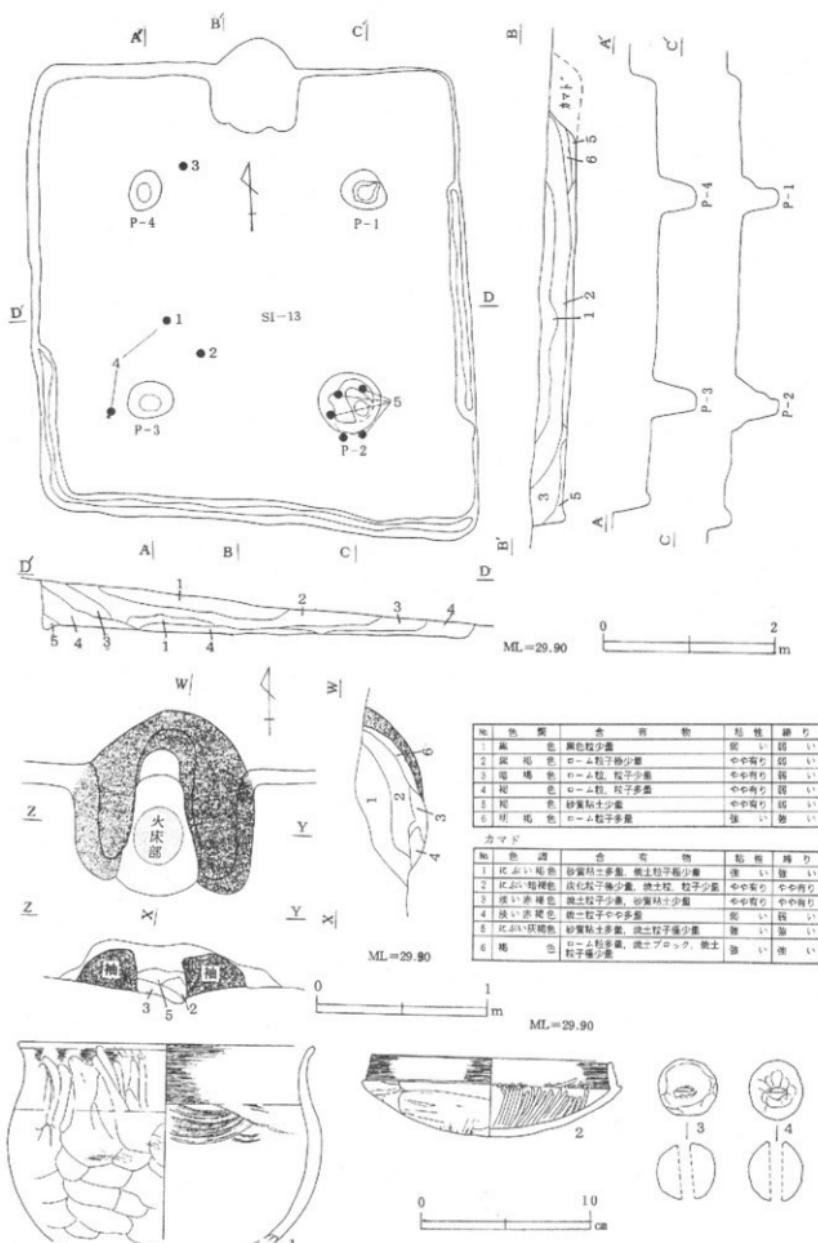
番号	器種	法量(cm)			重量(g)	材質	出土地点	備考	
		最大長	最大幅	最大孔厚					
3	土 玉	3.4	3.4	1.1	35	土 製		完 形	
4	土 玉	3.5	3.2	1.0	40	土 製		完 形	

第14号住居跡 (第23図、24図、図版3—6)

本跡は、13号住居跡の南側3mに位置し主軸をN—15°—Wに置き一辺5.3m程の方形プランを呈し、掘込みは、西側で70cm、東側で25cmを測る。傾斜はやや強い。床面は、ほぼ平坦に移行し、竈前面、中央部で縦りはややある。周溝が一周する本例は、本遺跡では少ない。U字状で浅く巡る。

柱穴は、4ヶ所検出され、円形状プランで径45~60cm、掘込みは30~50cm程で三角形プラン。P1は、浅く方形状プラン。

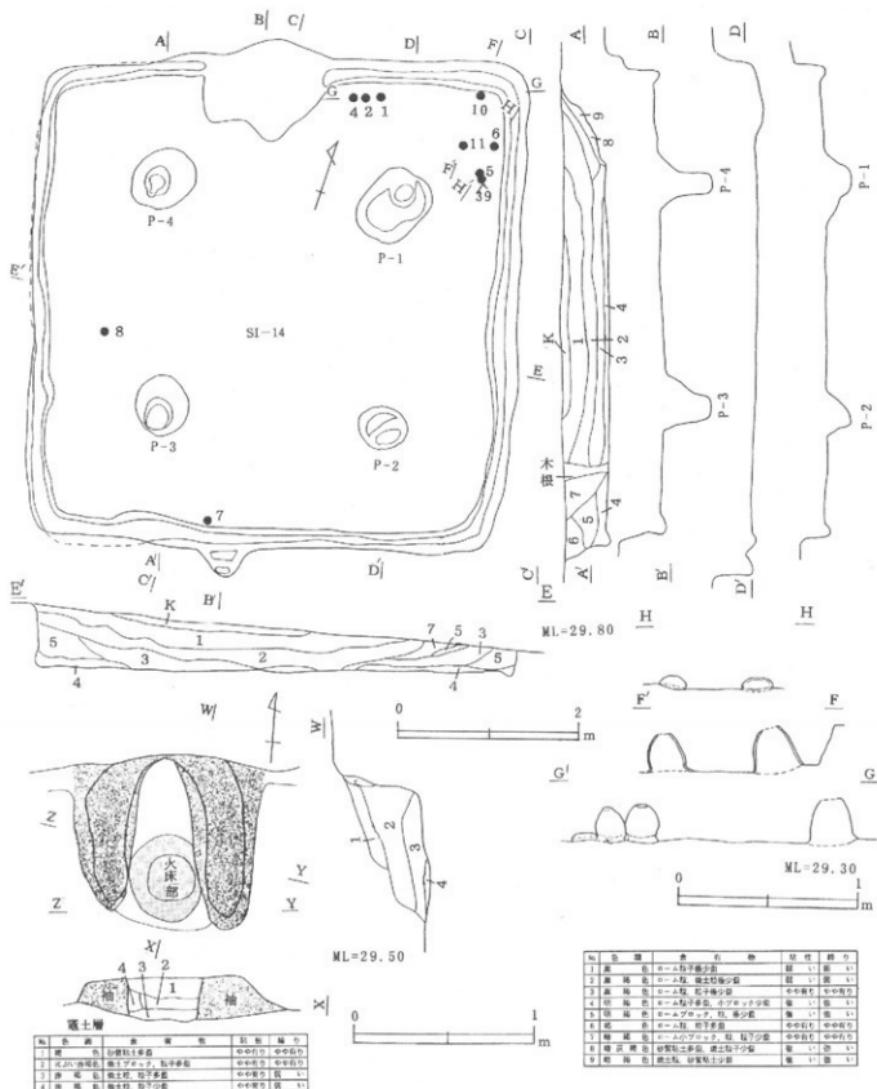
覆土は、9層に分類され色調は黒色、黒褐色、暗褐色、暗灰褐色、明褐色等が観察された。層序はレンズ状の自然埋積を示す。南側にやや乱れがある。粘性、縦りはややある。



第22図 第13号住居跡、竈、出土遺物実測図

竈の遺存は悪い。袖部は、長く直線的で170cm程で火袋前面に火床部が位置している。コの字状プラン。用材は、全て砂質粘土を用いている。

遺物は、竈周辺東側に使用状態の感じで位置し検出された。小型長胴形の1、2、安定した底部から弱く外反し立ち上がる。杯は、口縁部内傾の3と直立の4とも口唇部が尖る。半球形の5～



第23図 第14号住居跡, 竈, 実測図



第24図 第13・14号住居跡出土遺物実測図

9は締じてやや深め、口径は14cm前後で、10はやや古いタイプの腹で12号住居跡出土に近い。三角形状からやや崩れている。11は長胴形のタイプで器内は薄く口唇部は開く。本跡の時期を暗示する土器。器形の変化を捉える貴重な出土状態。

住居跡プラン、竈、出土遺物の特徴等から鬼高Ⅲ式の時期が推察される。

出土土器観察表(第24図)

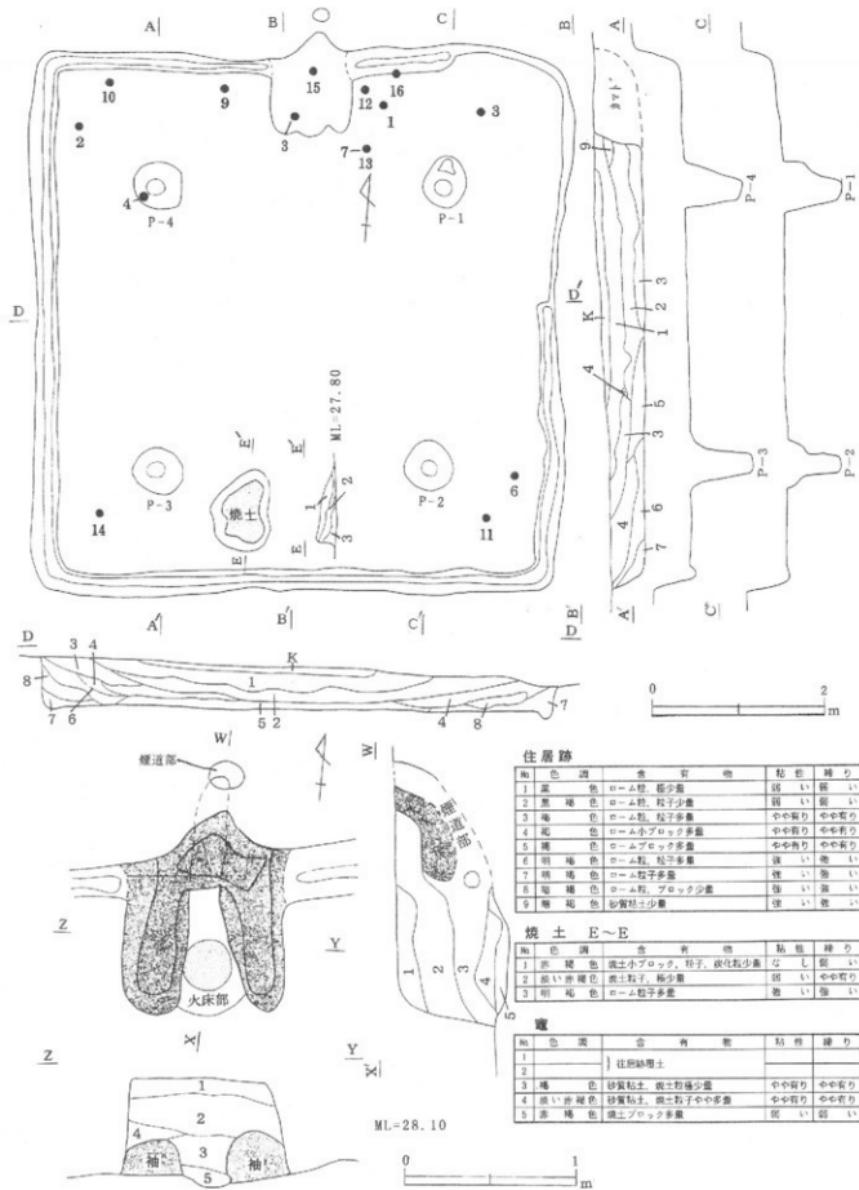
番号	器種	法量(cm)				器形の特徴	整形技法	胎土・焼成・色調	備考
		口径	胴径	底径	高さ				
1	甕 土師器	16.4	18.9	7.2	19.7	ややいびつ、長射形。 頸部「く」の字状、肥厚。	横ナデ ヘラケズリ ナデ	長石、細石、雲母 暗褐色	100% 床直
2	甕 土師器	14.3	18.0	6.9	19.2	やや不整形な甕状。 器形、頸部直立し口唇部に移行。	横ナデ ヘラケズリ ナデ	長石、細石、雲母 暗い赤褐色、内黒褐色	99% 床直
3	杯 土師器	13.6		3.0	5.0	須恵器模様化に見られる 器形。	横ナデ ヘラケズリ ナデ	精選 灰褐色、一部黒色	100% 床直
4	杯 土師器	14.2		4.1	4.2	浅い体部。 口縁部、内傾気味。	横ナデ ヘラケズリ ナデ	細石、長石、雲母 黒褐色、一部褐色	95% 床直
5	杯 土師器	15.0		2.5	4.7	底部尖り気味。 口縁部短く直立。	横ナデ ヘラケズリ ヘラミガキ	精選 黒褐色	100% 床直
6	杯 土師器	15.8		3.0	4.8	球形状で、口縁部外傾氣味。	横ナデ ナデ ヘラケズリ	精選、長石 暗褐色、一部黒色	100% 床直
7	杯 土師器	14.2		5.0	4.7	半球形で鉢状。 口縁部短く内傾。	横ナデ ナデ ヘラケズリ	精選 にぶい黒褐色	99% 床直
8	杯 土師器	14.8		3.8	5.0	半球形状でやや深め、口 縁部は尖り気味。	横ナデ ヘラケズリ ナデ	スコリア、雲母 灰色	90% 細片 覆土中
9	杯 土師器	15.3		2.5	4.4	半球形状で、口縁部は直 立。やや長めで尖る。	横ナデ ナデ ヘラケズリ	精選 黒褐色	60% 床直
10	瓶 土師器	16.4	22.8	9.0	20.9	制部が強く張る器形。 口縁部外傾。	横ナデ ヘラケズリ ナデ	細石、長石 にぶい黄褐色、一部黒色	95% 床直
11	瓶 土師器	19.8	17.8	6.2	20.5	器肉の薄い長胴形で、口 縁部は強く外反する。	ヘラケズリ ナデ	長石、細石 褐色、一部黒色	100% 床直

第15号住居跡 (第25図、27図、26図、図版3-7・8、4-1)

本跡は、12号住居跡の東側32mに位置し検出された。主軸をN-3°-Wに置き東西6.2m、南北6.3mの方形プランを呈する。掘込みは、西壁面立ち上がりは60cm、東側では、35cmと傾斜は強い。床面は、ほぼ平坦に移行し西側、竈前面で縁を持ち、一部に焼土が遺存。周溝は、弱いU字状形態で東側の一部を除きほぼ巡る。

柱穴は、4ヶ所確認され、径50~60cm程の円形、楕円形状形態で掘込みは、60~70cm前後で円筒形状形態。P1、P2は二段に掘り込む。

覆土は、9層に分類され色調は黒色、黒褐色、褐色、暗褐色、明褐色等で層序はレンズ状の自然埋積。縊り、粘性はやや強い。本跡遺跡の中では一般的覆土である。



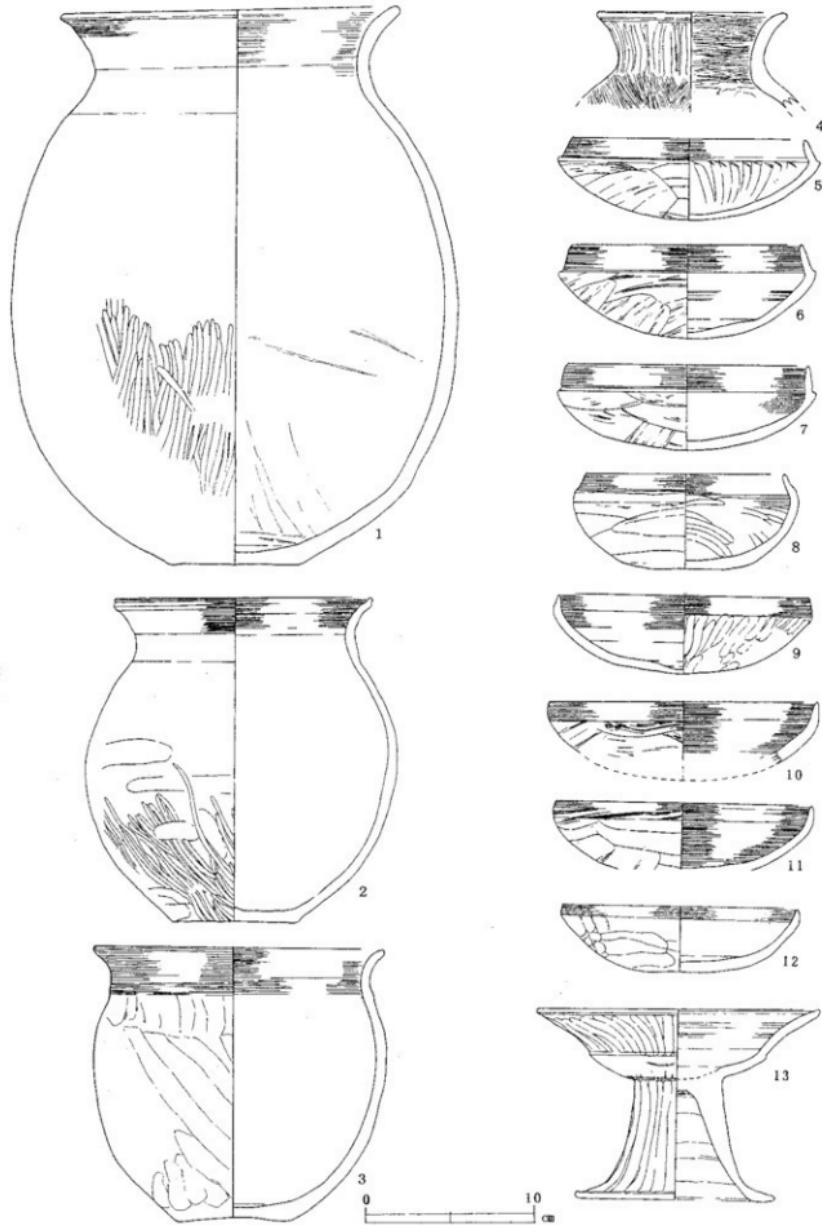
第25図 第15号住居跡、竈、実測図

甌は、北壁面に位置し検出され一部天井部が遺存、U字状プランで袖部は直線的に90cm程伸び、火袋前面部に火床部が円形状に認められた。用材は、全て砂質粘土を用いている。

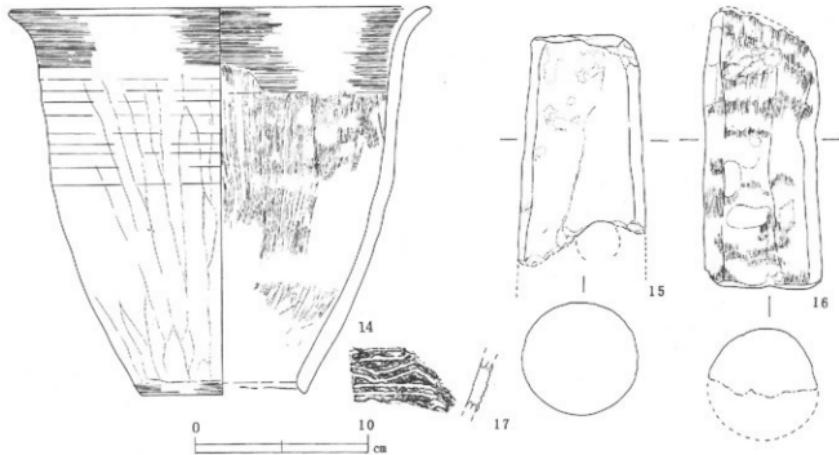
遺物は、甌側に集中して出土1、2、3は大型、小型の甌で最大径は胴中位に置く。括れはやや強く「く」の字状、口唇部は丸みをもつ。4は小型甌で口縁部のみ。杯は、須恵器模倣化に見られる5、6、7と半球形の8~12があり8は、碗状に近い。口径、器高は14cm、4cm前後とほぼ同様な器形。13は高杯で本時期でも本器形が残存する。脚部は筒形、裾は短く開き、丸く収める。杯体部は弱く括れてから外反し口縁部は強く開く。甌は、胴部が弱く張り口唇部は丸く収める。やや長胴化に移行しつつある器形。その他、土製支脚15、16が出土している。17は、浮島期の胴部か、半裁竹管の施文。出土遺物から本跡は、鬼高Ⅱ期末が推察される。

出土土器観察表(第26図)

番号	器種	法量(cm)			器形の特徴	整形技法	胎土・焼成・色調	備考
		口径	胴径	底径				
1 甌 土師器		20.1	26.6	7.7	26.6 胴部最大径を下位に置く 器形で頭部くの字状に外反。	横ナデ ヘラケズリ ナデ	細石、長石、雲母 褐色、一部黒褐色	95% 床直
2 甌 土師器		15.8	18.6	7.6	19.5 球形状胴部器内は薄く頬部くの字状。口唇部立つ。	ヘラミガキ? ナデ	細石、長石、雲母 にぶい黄褐色	95% 床直
3 甌 土師器		18.0	17.4	7.1	16.2 最大径を胴部近くに置く 頭部は弱く、くの字状。	横ナデ ヘラケズリ ナデ	雲母、長石、細石 にぶい黄褐色	99% 床直
4 甌 土師器		11.3			小型の甌で口縁部のみ、 頭部の彫れは強く短い。	横ナデ ナデ	黒褐色	10% 床直
5 杯 土師器		14.0		3.0	5.0 口縁部が内傾する古いタイプ。肩部の稜は著著	横ナデ ナデ ヘラケズリ	長石、雲母、細石 淡い赤褐色	99% カマド中
6 杯 土師器		13.7		2.8	5.7 5より口縁部や長め、 内傾は弱い。体部も深い。	横ナデ ナデ ヘラケズリ	細石、長石、雲母 黒褐色	95% 床直
7 杯 土師器		14.5		3.2	5.2 体部はやや浅くなり、口 縁は長く直立、口唇部尖る。	横ナデ ナデ ヘラケズリ	長石、スユリア にぶい灰褐色	70% 床直
8 杯 土師器		11.9		5.0	6.8 やや半球形の形態に近い。 碗状口縁は内傾尖る。	横ナデ ナデ ヘラケズリ	細石、スコリア、長石、 雲母 黒褐色	
9 杯 土師器		15.0		3.0	4.6 半球形の杯の中では、口 縁部が長い。 口唇部は尖る。	横ナデ ヘラケズリ ナデ	雲母、スコリア	95% 床直
10 杯 土師器		16.0			半球形で口唇部尖る。	横ナデ ナデ ヘラケズリ	長石、雲母	80% 覆土中
11 杯 土師器		15.3		3.2	4.5 半球形で口唇部は直立し、 口唇部は尖る。	横ナデ ヘラケズリ ナデ	雲母、精選	70% 覆土中
12 杯 土師器		14.2		4.0	3.9 半球形で口唇部は直立し、 口唇部は尖る。	横ナデ ヘラケズリ	精選 黒褐色、一部褐色	60% カマド中
13 高杯 土師器		17.0		20.0	11.3 筒状脚部は短く開く。杯 は弱く彫れは外反。	ヘラミガキ ヘラケズリ ナデ	細石、雲母、長石 にぶい黄褐色	95% 床直



第26図 第15号住居跡出土遺物実測図



第27図 第15号住居跡出土遺物実測図

出土土器観察表(第27図)

番号	器種	法量(cm)				器形の特徴	整形技法	胎土・焼成・色調	備考
		口径	胴径	底径	高さ				
14	瓶 土脚器	25.3	20.7	9.8	22.6	胴部が弱く張る器形で、 口縁部は外反、丸く收める。	構ナデ ナデ ヘラケズリ	細石、砂、長石 にぶい赤褐色	20% 覆土中

土製製品(第27図)

番号	器種	法量(cm)			重量(g)	材質	出土地点	備考	
		最大長	最大幅	最大厚					
15	支脚		6.8		630	土 製	甌 中	脚下位を欠失、円形、筒状 出土カマド中	70%
16	支脚	7	6.5		410	土 製	甌 東	円筒状で上部を欠失、壁面から出土	40%

第16号住居跡 (第28図、29図、図版4-2)

本跡は、14号住居跡の東側8mに位置し主軸をN-2°-Wに置き東西7.3m、南北7m方形プランを呈し掘込みは、西側で55cm、東側で25cmを測る。傾斜は強い。床面は、ほぼ平坦に移行し、甌前面、中央部で締りはある。周溝は、ほぼ一周する。本遺跡では11号住居跡に類例があるが少ない。U字状で浅く巡る。

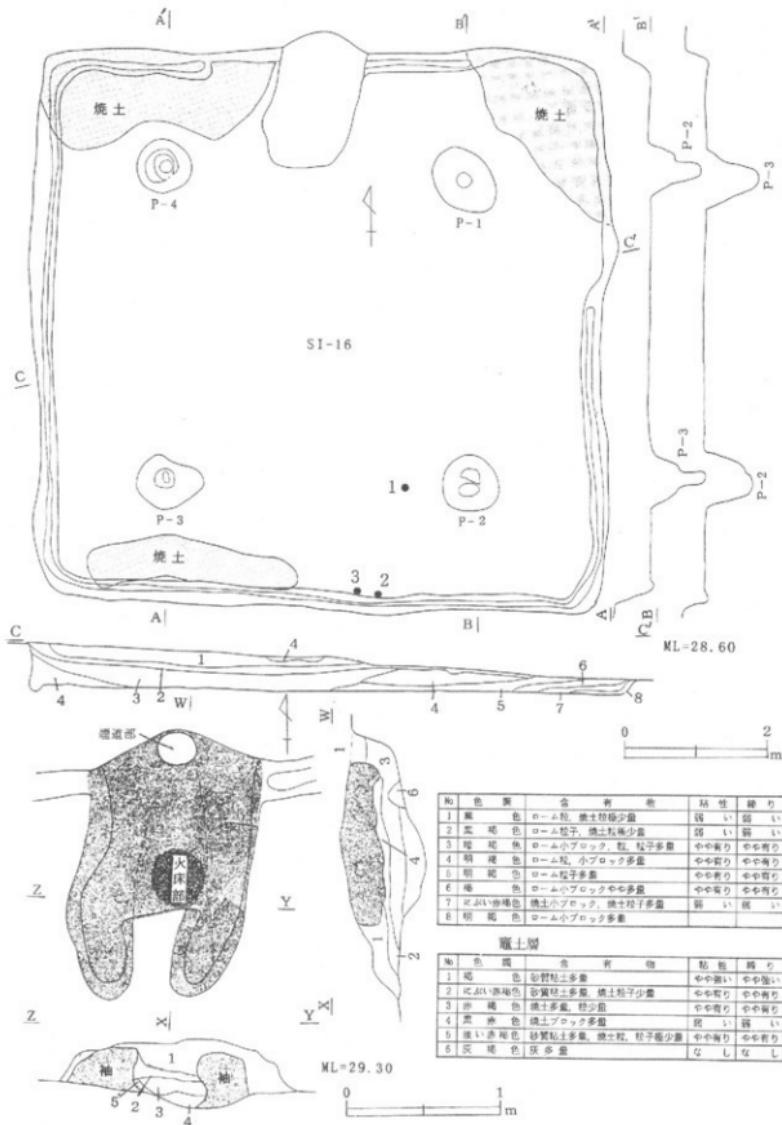
柱穴は、4ヶ所検出され、円形状プランで径70~90cm、深さは60~70cmで二段の掘込みとU字形状態。比較的大型の柱穴である。

覆土は、8層に分類され色調は黒色、黒褐色、暗褐色、鈍い赤褐色、明褐色等が観察され層序は投げ込み的とレンズ状の自然埋積を示す。多量の焼土が見られた。粘性、締りはややある。

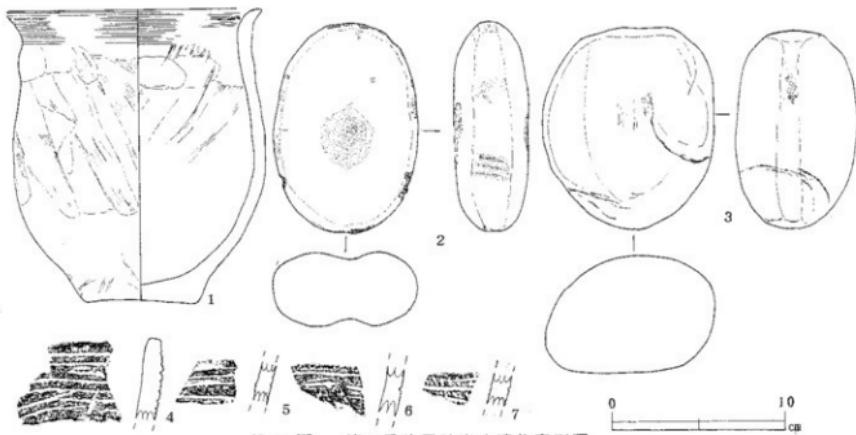
甌は、遺存状態は良く、天井部の大部分が生き袖部は、短く直線的で50cm程で火床部が下位に位置する特異な状態。コの字状プラン。用材は、全て砂質粘土を用いている。

遺物は、南側の壁面に添ってみられた。小型長筒形の1と安山岩の打製石器があり2は凹石兼用。坏の器形の窺えるものはなく図示出来なかった。

遺構プラン、規模、遺物から鬼高期と推察される。



第28図 第16号住居跡・竈平面図



第29図 第16号住居跡出土遺物実測図

出土土器観察表（第29図）

番号	器種	法量(cm)				器形の特徴	摹形技法	胎土・焼成・色調	備考
		口径	側径	底径	高さ				
1	甕 土器	15.0	14.7	7.1	16.9	カネに近い器形。 肩部の張りは弱く口縁短く外反。	横ナデ ヘラケズリ ナデ	細石、長石、雲母 にぶい褐色	90% 床直

石器一覧表(第29図)

番号	器種	法量(cm)			重量(g)	材質	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚				
2	打製石器	12.2	8.5	4.4	670	安山岩	床直	中央に凹み有り
3	打製石器?	11.8	10.0	6.9	1,200	安山岩	床直	一部に使用痕有り

第17号住居跡（第30図、31図、図版4-3）

本跡は、16号住居跡の東北側10mに位置し検出された。主軸をN-31°Wに置き東西4.6m、南北4.5mの方形プランを呈するが外側に浅い掘込みが南側で1m、東、西側では60cm前後で巡り本跡部分も住居跡と捉えるべきか判断に迷った。覆土からは同時期の掘込みと推察出来る。掘込みは西側で65cm、東側で50cmと平坦に近い。床面は、ほぼ平坦に移行し西側、竈前面で縦りを持つ。一段高い部分は30cm程の段差をもつ。周溝は、弱いU字状形態で竈東側の一部を除きほぼ巡る。

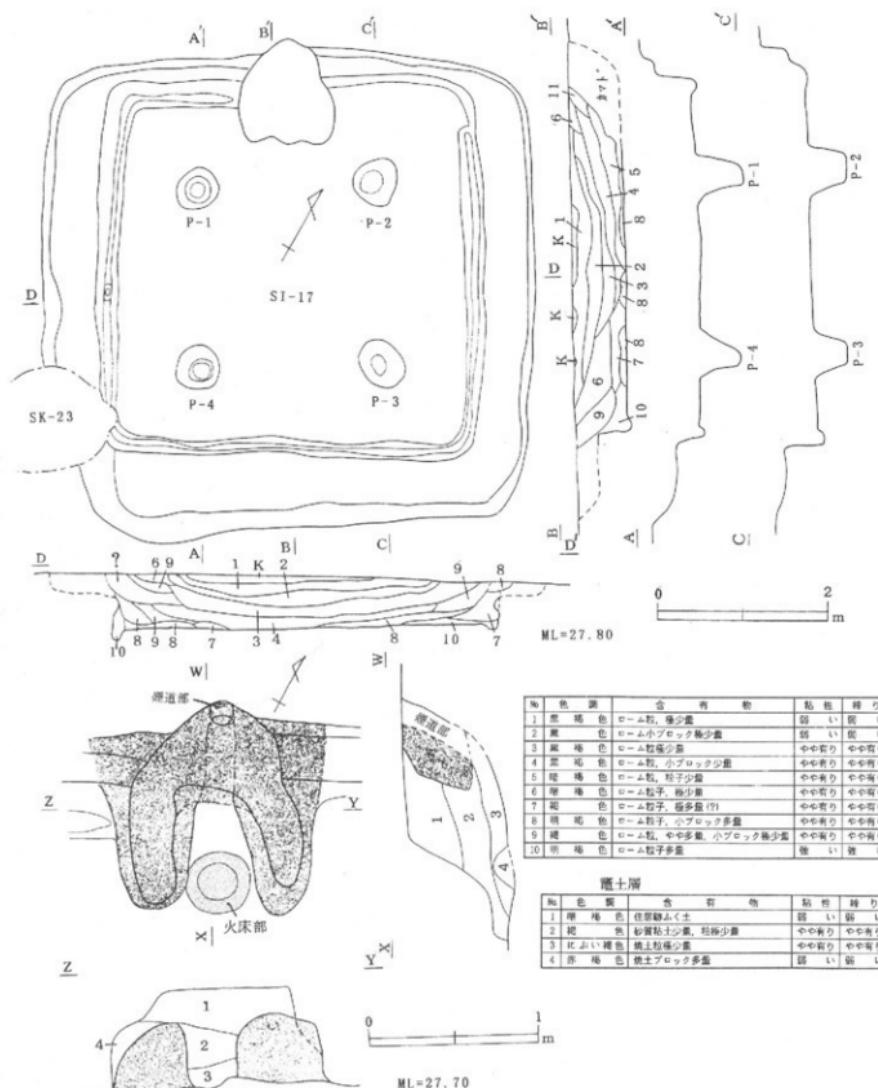
柱穴は、4ヶ所確認され、径40~50cm程の円形、梢円形状態で掘込み深さは、40~50cm前後でU字状形態を呈する。

覆土は、10層に分類され色調は黒色、黒褐色、褐色、暗褐色、明褐色等で層序はレンズ状の自然埋積。一部投げ込み状で粘性、縫りはややある。

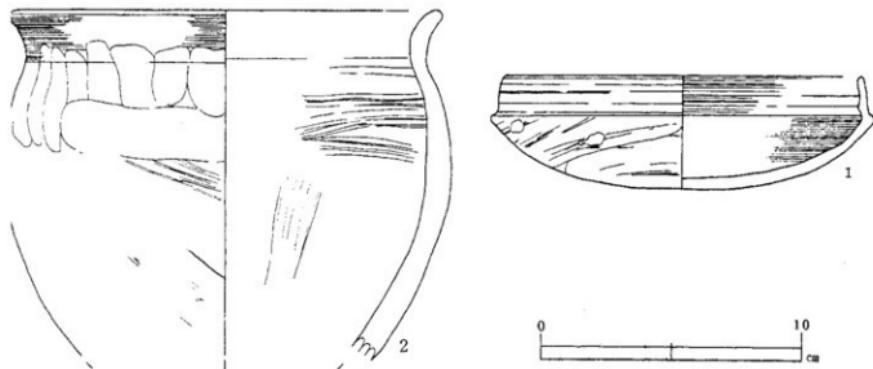
竈は、北壁面に位置し検出され天井部が遺存、火袋はU字状プランで袖部は直線的に60m程度伸び、火袋前面部に火床部が円形状に認められた。用材は、全て砂質粘土を用いている。

遺物は、少なく図示出来るものは少ない。1は小型の瓶、2は肩部に縦をもつ壺である。口唇部はやや尖り氣味。

遺物、遺構プランから鬼高期末の所産か。



第30図 第17号住居跡・竪実測図



第31図 第17号住居跡出土遺物実測図

出土土器観察表（第31図）

番号			器形の特徴及び文様	整形技法	胎土・焼成・色調	備考
1 土器	壺	A 14.0	肩部に棱をもつ、口縁部直立し長目、体部は浅い。	ナデ	精選、黒褐色	覆土中 60 %
		B 4.4		ヘラケズリ	良い	
		C 4.0				
2 土器	甕	A 16.8	小型長胴形で括れば弱く、頸部は弱い「く」の字状。	ナデ	細石、雲母、長石	50 %
		B —		ヘラケズリ	赤褐色	
		C —			やや不良	

第18号住居跡（第3図図版4-4）

本跡は、15号住居跡の東北側10mに位置し検出された。主軸を約N-1°-Wに置き東西3~3.6m、南北3.5mの不正形プランを呈する。掘込みは25cm前後で東側では10cm前後と傾斜が見られる。床面は凹凸が見られ不規則、締りはない。ローム剥出し状であった。周溝、竈、柱穴は検出されなかった。

覆土は、3層に分類され色調は暗褐色、黒色、明褐色等で層序はレンズ状の自然埋積を示すが一部攪乱が見られる。粘性、締りは弱い。

遺物は、土師器破片が10片程見られたが図示出来るものはない。本跡の性格は判断に苦しむが隣接する住居跡の位置？状窓穴。

一応、住居跡としてあつかったが再検討の余地があろう。

2. 土 坑

本遺跡からは、29基の土坑が検出された。しかし明確に時期の特定出来るものは少なく、遺物も皆無に近い。よって調査番号の順に概要を述べる。

第1号土坑（第32図、図版4—5）

本跡は、平坦部に検出された土坑で町道より位置し長径1.1m程の梢円状を呈し、底部は鍋底状で深さは25cmを測る。凹凸があり締りは悪い。覆土は、3層に別れ2層では焼土を含む。締り、粘性はある。

遺物は皆無で、時期、性格は不明。

第2号土坑（第32図、図版4—6）

本跡は、1号住居跡の東南8m程に位置し長径2.15m、短径1.5mを測る長円形プランで掘り方は、不規則で東側はオーバーハング状、南側は、なだらかに傾斜。底部は、二段になり、深さは70cm前後である。

覆土は、2層で黒褐色、明褐色、粘性、締りは強い。

本跡も出土遺物は皆無で時期、性格は不明。

第3号土坑（第32図）

本跡は、1号住居跡の南2mに位置し検出された。崩れた三角形状を呈し南側で1.3m、北側で40cm前後を測る。長さは1.4mで掘込みは、U字状形態で65cm程の深さをもつ。

覆土は、6層に分けられ一部投げ込みと自然埋積が見られる。3層を除き投げ込み的層序を示す。粘性、締りは1、2、3層は強い。

遺物は、刷毛状調整痕もつ細片が2層から出土している。時期は、出土遺物から古墳時代前後、性格等は不明。(1)

第4号土坑（第32図）

本跡は、3号土坑の南側5mに位置し検出された。梢円形状プランで長径1.4m、深さ20cm程の浅い掘込みで底部は平坦、やや締りをもつ。東側に付随する様に小掘込みが存在、ともに浅い。覆土は、2層で色調は暗褐色、褐色で粘性、締りは弱い。

遺物は、皆無で時期、性格は不明。

第5号土坑（第32図、図版4—7）

本跡は、4号土坑の東側4mに位置し検出された。浅い不整形な掘込みで攪乱状である。本跡を造構として扱うべきか疑問があった。

覆土は2層で色調は、鈍い褐色、明褐色で自然埋積？。判断しかねる層序である。

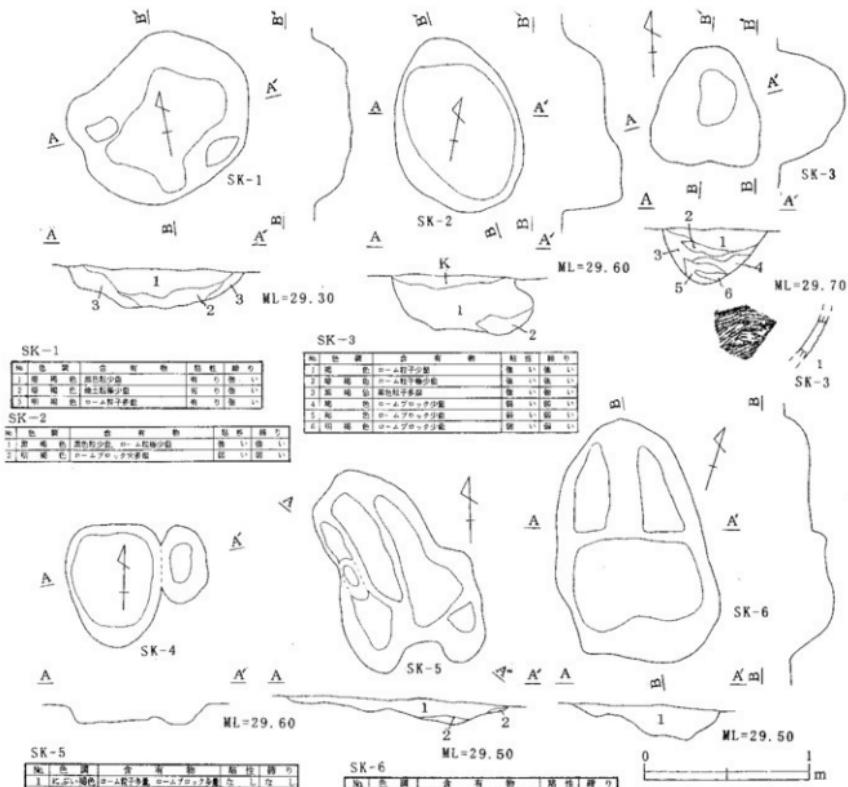
遺物は皆無で時期、性格は不明。

第6号土坑（第32図、図版5—8）

本跡は、5号土坑の東1mに位置し検出された。本跡も5号土坑同様攪乱の可能性がある。底部は二段になる。長径3mの長円形プラン。掘込みは40cmで底部はやや凹凸が見られ、締りは弱い。

覆土は1層の暗褐色。粘性なし陶はややある。

出土遺物は皆無、時期、性格等の決め手はない。



第32図 第1・2・3・4・5・6号土坑実測図

第7号土坑（第33図、図版5-1）

本跡は、6号土坑の南3mに位置し検出された。長径1.5m、短径1.2m程の長円形状プランで弱いU字状掘込み。深さは40cmを測る。層序は複雑で投げ込み的、3層と搅乱が見られる。粘性、締りは弱い。層序から新しい時期？。遺物は皆無である。

性格、時を確定出来るものはない。

第8号土坑（第33図、図版5-2）

本跡は、7号土坑の南3mに位置し検出された。長さ1.5m、幅90cm程の方形プランで底部は凹凸が見られ、締りは悪い。

覆土は、4層で黒褐色、褐色、暗褐色等の自然埋積状を示す。粘性、締りは強い。

遺物は、皆無で時期、性格を判断するものはない。本土坑群の中では唯一の方形プラン。

第9号土坑（第33図）

本跡は、4号住居跡の西側に位置し検出された。三角形状プランで長辺1.1m程の遺構で掘込

みは35cm前後、底部は東側にゆるく傾斜を示す。

覆土は、1層で褐色で締り粘性は弱い。

遺物は皆無。時期性格を確定すべきものはないが、土層等から近世の遺構か。

第10号土坑（第33図）

本跡は、長径1.5m、最大幅88m手前を測る。長円形のプランをもつが、

中央部のみ45cm程円形状に掘りこむ変則的な掘り込みをもつ。

遺物は皆無で、時期は不明。覆土は1層で締りはある。

第11号土坑（第33図）

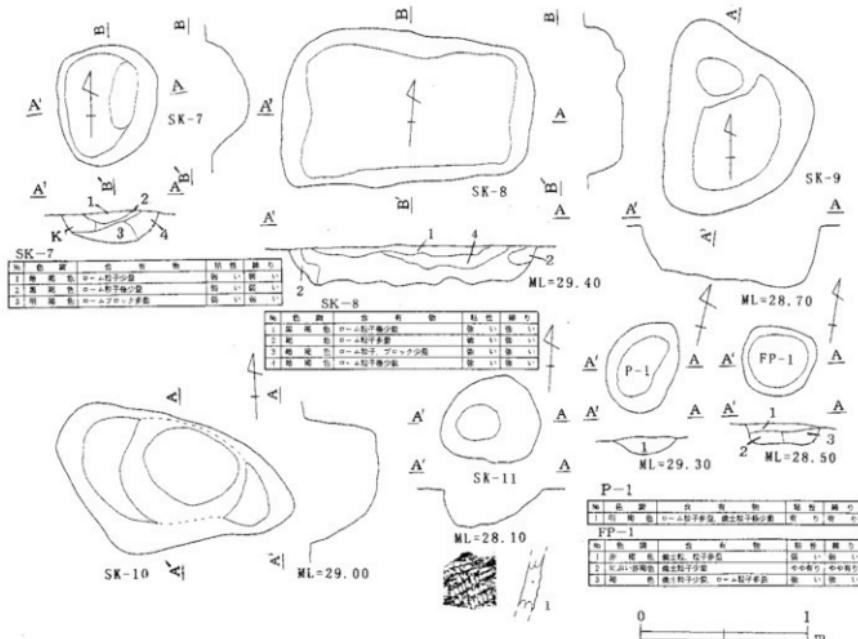
本跡は、調査区の南西端に確認された小土坑で楕円形状プラン。長径60cm、短径50cm程で深さは、20cm前後。やや崩れたU字状掘込み。底部はやや不規則で締りは弱い。

覆土は2層、淡い黄橙色と褐色で締りは強い。遺物は皆無で粘性はややある。

遺構の時期、性格は不明。覆土からは縄文時代？。(1)

第12号土坑（第34図、図版5-3）

本跡は、6号住居跡の南側4mに位置し検出された。楕円形状プランで底部は二段になり深い部分は、更に別れる。掘込みは鍋底状で、深さは45cm程を測る。径1.3m前後の規模。底部は、



第33図 第7・8・9・10・11号土坑、P-1、FP-1 実測図

凹凸をもち締りは悪い。

覆土は、3層で鈍い褐色、暗褐色、褐色で粘性、締りはややある。層序は短い時間の自然埋積か？遺物は皆無である。

性格、時期は不明。覆土からやや古い時期？。

第13号土坑（第34図、図版5—4）

本跡は、12号土坑の東側6mに老師検出された。倒卵形状で長径8m、短径6m程の規模で掘込みは10cm程と浅く、擾乱？。遺物は皆無。時期、性格は不明。

覆土は、1層で粘性、締りはなく褐色で擾乱の可能性が高い。

第14号土坑（第34図、図版5—6）

本跡は、13号土坑の東北側2mに位置して検出された。長径1.1m、短径90cm程の長円形状プランを呈する。掘込みは浅く20cm、底部は、ほぼ平坦、締りはややある。覆土は、2層で暗褐色、褐色で締りは弱い。遺物は確認面で掘の内式の小破片が出土しているが本跡との関係は不明。時期、性格は不明で擾乱の可能性あり。

第15号土坑（第34図、図版5—6）

本跡は、14号土坑の東側、12号住居跡の北側に位置し検出された。径1m程の円形プランで掘込みは浅く15cm前後で底部は平坦、締りはややある。覆土は、2層で暗褐色、褐色。層序は自然埋積状である。粘性、締りは弱い。遺物は皆無。

時期、性格は不明。

第16号土坑（第34図、図版5—7）

本跡は、12号住居跡の東側4mに位置し検出された。径12m程の円形状プランで掘込みは40cm前後とやや深く鍋状。中央部に小掘込みがある。深さは5cm前後。覆土は3層で鈍い橙色、鈍い黄橙色、褐色等で粘性、締りはややある。遺物は皆無。

時期、性格は不明。覆土からはやや古いか。

第17号土坑（第34図、図版5—8）

本跡は、16号土坑の南側5mに位置し検出された。長径1.2m程の梢円形状プランで底部は北側に向かって深さを増し30cmを測る。凹凸があり締りは悪い。覆土は、1層で粘性、締りは弱く擾乱の可能性がある。遺物は皆無。

時期、性格は不明。

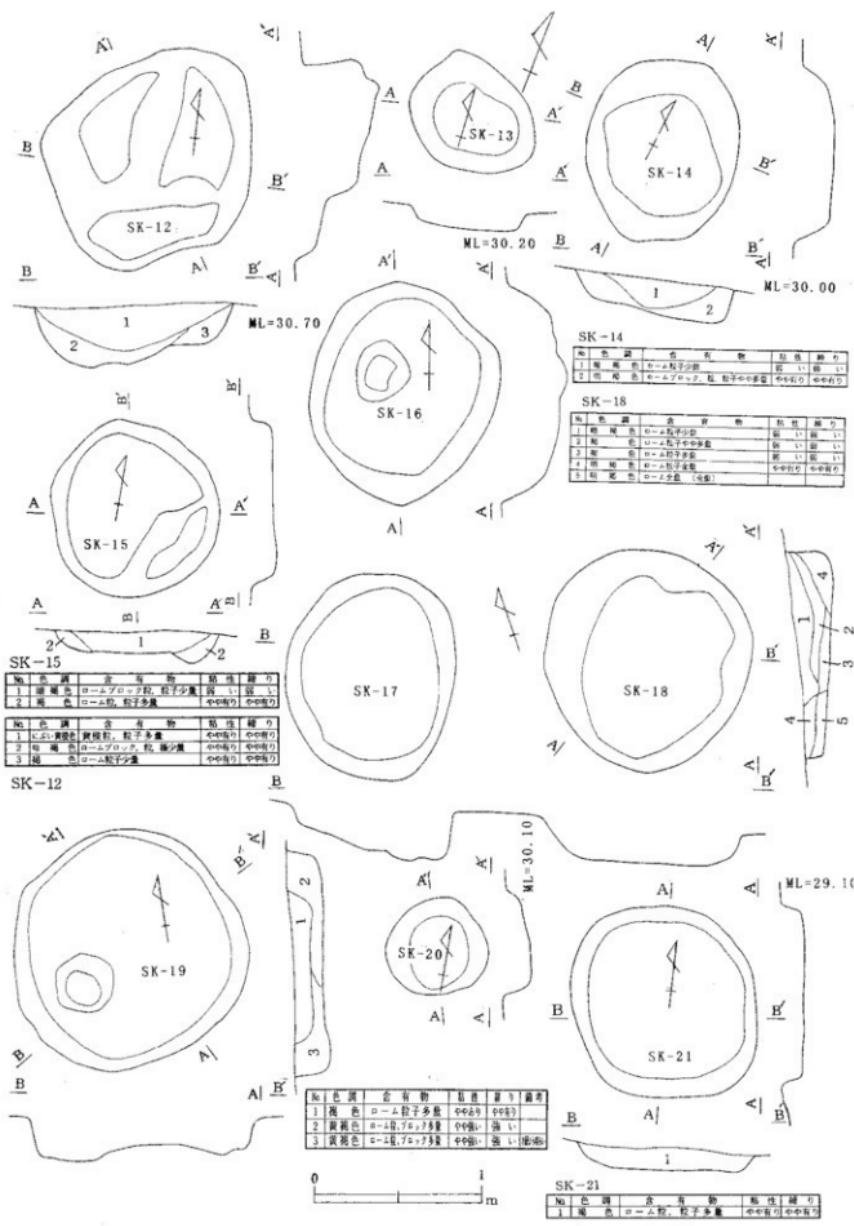
第18号土坑（第34図、図版6—1）

本跡は、17号土坑の東側に位置し並列して検出された。径1.3m程の円形プランで掘込みは浅い。壁面はなだらかで底部は平坦に移行する。覆土は、5層に分けられ暗褐色、褐色、明褐色で粘性、締りは弱い。一部自然埋積状であるがやや新しい時期か。遺物は皆無。性格、時期は不明。覆土から近世の遺構？。

第19号土坑（第34図、図版6—2）

本跡は、18号土坑の東北側6mに位置し検出された。径1.4m掘込みは20cm前後と浅い。底部は凹凸があり締りは悪い。覆土は、3層で暗褐色、褐色等。粘性、締りは弱い。底部西側に浅い掘込みが見られる。遺物は皆無。

時期、性格は不明。覆土からはやや新しい時期。



第34図 第12・13・14・15・16・17・18・19・20・21号土坑実測図

第20号土坑（第34図、図版6-3）

本跡は、13号住居跡の南側に位置し検出された。径60cm程の円形プランの造構で掘込みは、15cmと浅く底部は、東側に傾斜を示す。底部は締りは弱い。

覆土は、1層で褐色、粘性、締りは弱い。覆土からはやや新しい時期が推察される。

遺物は皆無。性格、時期は不明。

第21号土坑（第34図、図版6-4）

本跡は、20号土坑に隣接し検出された。径1.1m程の円形状を呈する。掘込みは15cmと浅く底部は東側に傾斜を示す。底部は若干凹凸がある。締りは弱い。覆土は、1層で褐色。自然埋積？粘性、締りはややある。遺物は皆無。

時期、性格は不明。

第22号土坑（第35図）

本跡は、13号住居跡の東側に位置し検出された。確認面で焼土が多量に認められた造構でFPとすべきか判断に迷う造構。底部は、不規則な掘込みが4ヶ所認められた。掘込みは55cmと深い。覆土は、2層で1層は焼土ブロックが多量で赤褐色、2層は、明褐色で粘性、締りはややある。遺物は皆無。焼土の感じから開墾時の焼却穴？の可能性が強い。時期、性格は前述の可能性が高い。

第23号土坑（第35図、図版6-5）

本跡は、17号住居跡の西南隅部に位置し検出された造構で住居跡を掘込む。長円形状プランで長径1.4m、深さ90cmと本遺跡の中では土坑らしい掘込み。覆土は、造構の掘込み状に堆積？、めずらしい埋積の仕方である。これは自然なのか、人工的か、色調は黒褐色、暗褐色、褐色、明褐色の色調で自然埋積とも推察される。粘性、締りはややある。（3、4層）

第24号土坑（第35図）

本跡は、12号住居跡の北側10mに位置し検出された。径1.2m程の円形状プランで掘込みは鍋底状で平坦、締りはややあり、深さは20cmと浅い。覆土は2層で暗褐色、褐色で粘性、締りはややある。遺物は指頭押圧の圧痕がある縄文土器（浮島式）が出土している（35図4）時期性格を特定するものはないが覆土層から本遺跡の時期が推察される。性格は不明。

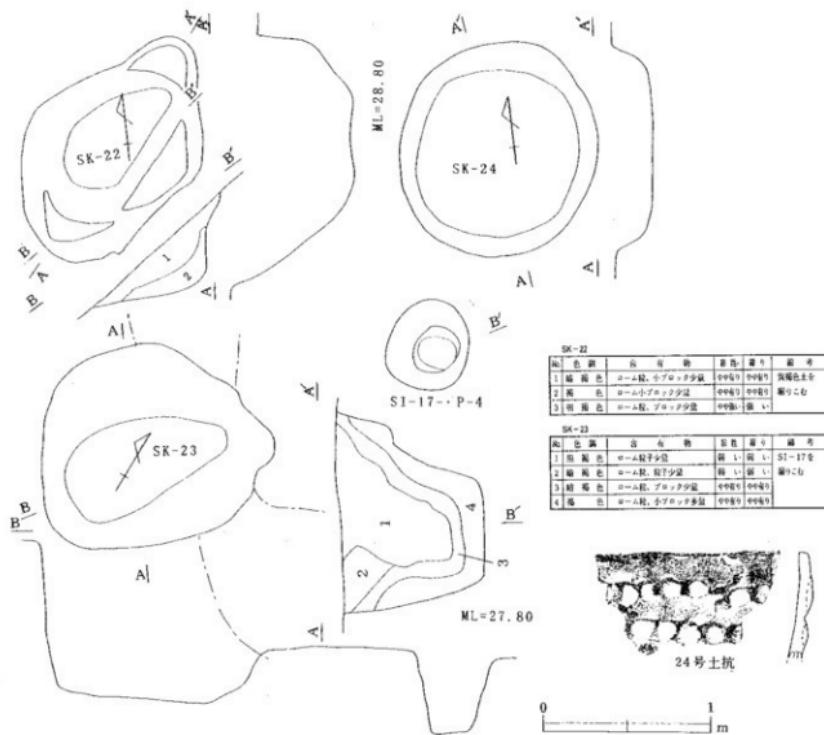
P 1（第33図）

本跡は、1号土坑の東側に位置し認められた造構で規模等からピットとした。倒卵形状造構で長径60cmで掘込みは12cmと浅く皿状。覆土は、明褐色の1層で焼土粒子を極小量含む。粘性、締りはややある。遺物は皆無。時期、性格は不明。開墾時の焼却跡の可もある。

FP-1（第33図）

本跡は、4号住居跡の北側7mに位置し検出された。径40cmの小掘込みで掘込みは14cmと浅い。上部は焼土層で、下部は、焼土粒の混入層で、一応FP-1としたが、ややまとまりすぎの感じで断定はしかねる。

周辺にはかなり開墾時の焼却跡がみられ、これとはやや時間差があると思われるが、断定は出来ない。



第35図 第22・23・24号土坑実測図

V 総 括

本遺跡は、前述のとおり一次調査で9軒余の住居跡が検出されている。時期は縄文時代の住居跡1軒、古墳時代の住居跡1軒、古墳時代後半～奈良時代前半の住居跡6軒、奈良時代の住居跡が1軒、平安時代の住居跡1軒と報告されている。

二次調査では、古墳時代の住居跡が14軒、奈良時代の住居跡が2軒、平安時代の住居跡1軒があり時期不明が2軒ある。そういう意味では一次調査とはかなりの時間差がある遺構群と推察されるが出土遺物を検討すれば、見解の相違の差と思われ、さほどの時間差はない一群の遺跡、集落と判断される。（注1）

二次調査の概略を述べれば規模、プランでは大型の6m前後のものが2、6、10、11、16があり全て北壁に竈をもち、柱は、4～6本で建てている。遺物の出土には疎密があり、断定は出来ないが古墳時代後半の鬼高Ⅰ類後半の範疇に納まる遺構である。

又、規模はやや小型であるが4、8、12、14、15はほぼ鬼高Ⅱ類の時期と推察される遺物、遺構プランをもつ。

奈良時代の遺構は、7、9、13、17号住居跡が上げられる。掘込み、規模、遺物、遺構プラン、主軸等から推察できる。

平安時代の住居跡は5号住居跡が遺物、遺構から推察される。1軒のみである。一次調査の分あわせ考えると本時期が遺跡の終末期にあたると推察出来る。

全体的に見れば、主軸方向がほぼ北に近く、竈が北壁に張りついた感じの遺構で坏は、いわゆる須恵器模倣化の器形が見られる。口縁部が内傾し肩部の稜が顕著で甕は、最大径を胴部中位後に置く。小型甕も同様の器形。高坏は、筒部が円筒状を呈する。瓶は三角形状形態でやや胴部に張りをもつ、本類の特徴は鬼高Ⅰ期2類、Ⅰ期後半に分類される。

器種は、瓶、小型瓶、鉢型土器、肩部に稜をもつ坏、半球形坏、断面三角形甕が見られた。一部Ⅱ期の土器が混入している。

Ⅱ期とした遺構はやや小型化し、主軸をやや西側に置くプランで、竈は、より顕著、大型になり外部に半円形状に掘込むタイプ。坏は、半球形のものが多くなり、肩部に稜をもつものは口縁部が直立になる。稜は、退化し弱くなる。甕は、大型、小型共長胴化してくる。瓶も同様で、胴部は弱く張る。鉢型土器は消失してくる。整形は、ヘラケズリ、ナデが一般化してくる。高坏は、カマド支脚に転用されてくる。

奈良時代、貞間期とした遺構は、主軸は更に西に触れ小型化したタイプで、遺物は少ないものと、ほぼ一式残すものが見られる。（7号住居跡）甕類は長胴化し鉢型土器は消失、瓶は、前類をもつものと器肉の薄い物が顕著になる。

その他、平安時代国分期の遺構は、5号住居跡に見られる。小型で浅く遺物は少ない。竈は外側にU字状に張り出し袖部は、取って付けた様な形態になる。

遺構の特徴は、周溝を2段にもつ12号住居跡と遺構が2段に掘込む？17号住居跡が見られる。又住居跡？と判断しかねる遺構が見られた。一応物置？とした……。

土坑は、24基検出されたが遺物が皆無で時期は出来ない。しいて上げれば覆土の色調、粘性等から縄文時代と古墳時代以降の物とに分けられるか。

総じて本遺跡は、古墳時代後半の鬼高期Ⅰ類後半に形成され2類、奈良時代真間期、平安時代初頭、国分Ⅰ類に消滅すると私考する。いわば一族、一統の限られた族、集団の集落と考えられる。そう言う意味では貴重な遺跡である。

更に分類、研究の進展に伴い細分類、最検討の余地が多々ある。時間との制約で土器編年の分類が出来なかった事は残念である。

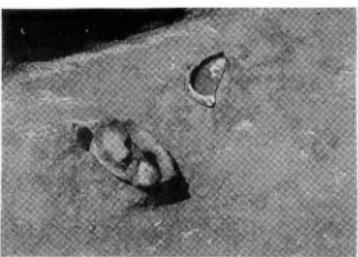
注1 一次調査報告書 麻生町教育委員会

抄 錄

フリガナ	ジュウサンブツイセキハックツチョウサホウヨクショ							
書名	十三仏遺跡発掘調査報告書							
発行者名	麻生町教育委員会・麻生町遺跡調査会							
所在地	〒311-3892 茨城県行方郡麻生町麻生1561-9							
編集者名	汀 安衛							
編集機関	鹿行文化研究所							
所在地	〒311-2211 茨城県鹿嶋市青塚718-3							
発行年月日	西暦 1999年12月10日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	
		市町村	遺跡番号				調査原因	
ジュウサンブツイセキ 十三仏遺跡	アソウマチ 麻生町 オオアザワク 大字麻生	08421	210	35° 59'	140° 29'	1998.07.01 1998.10.16	8,000 m ²	土砂採取に 伴う調査
所収遺跡名	種別	時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
十三仏遺跡	集落跡	古墳時代後半	住居跡	土器 (カメ、杯等)				



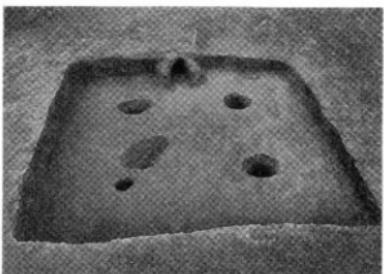
1. 平坦部(南側から)



5. 2号住遺物出状態



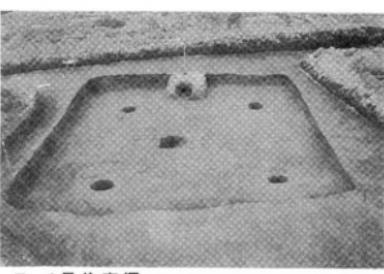
2. 平坦部(西側から)



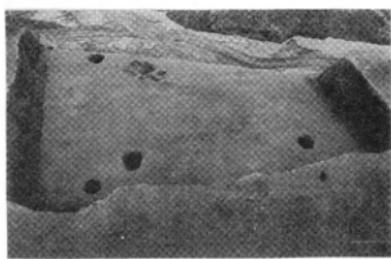
6. 2号住完掘



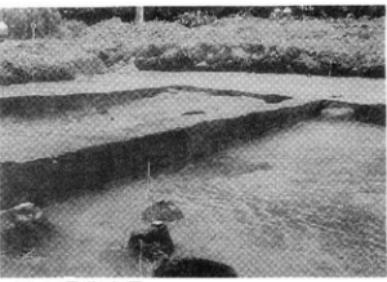
3. 1号住遺物出土状態



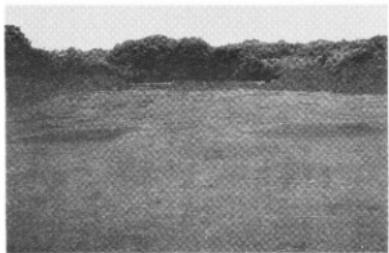
7. 4号住完掘



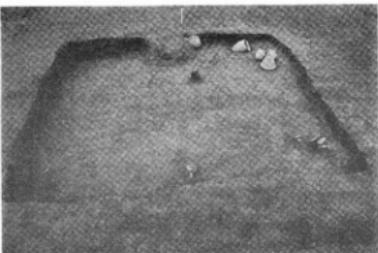
4. 1号住完掘



8. 5号住土層



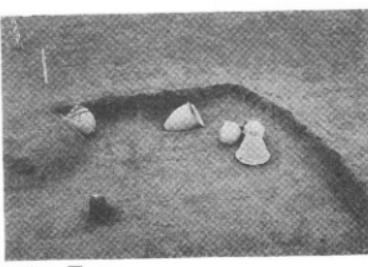
1. 斜面部遺構検出状態



5. 7号住遺物出状態



2. 調査終了後の全景



6. 同



3. 調査終了後の全景(西側から)



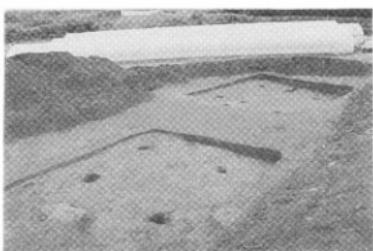
7. 8号住完掘



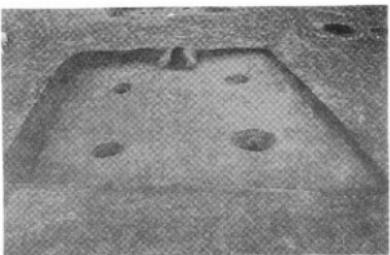
4. 6号住完掘



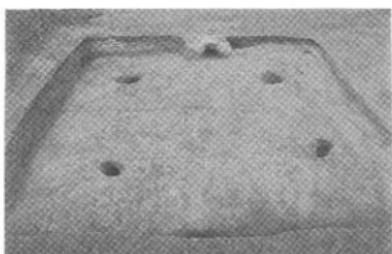
8. 9号住完掘



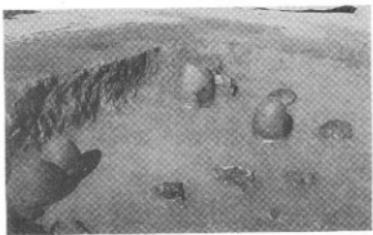
1. 10・11号住完掘(北側から)



5. 13号住完掘



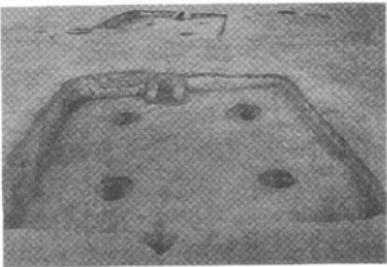
2. 10号住完掘



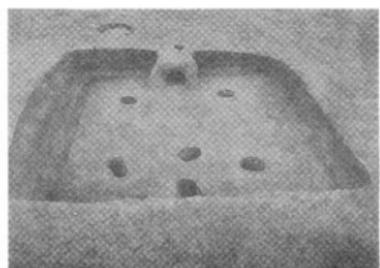
6. 14号住遺物出土状態



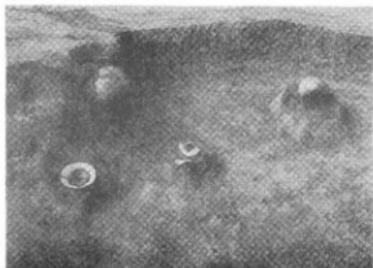
3. 11号住完掘



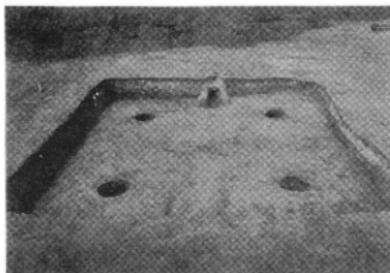
7. 15号住完掘



4. 12号完掘



8. 15号住遺物出土状態



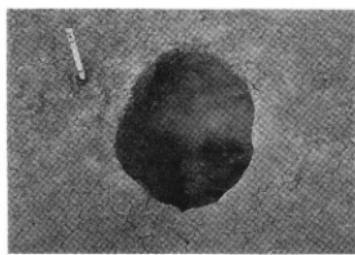
1. 15号住完掘



5. 1号土抗完掘



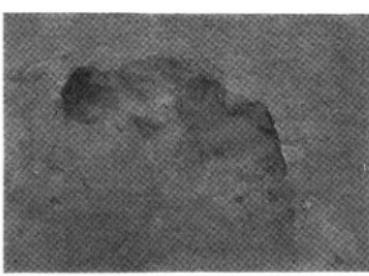
2. 16号住土層



6. 2号土抗完掘



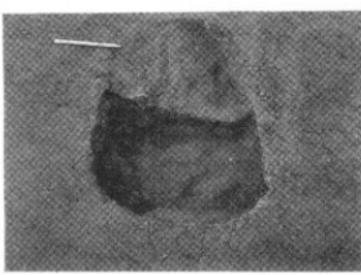
3. 17号住完掘と23号土抗



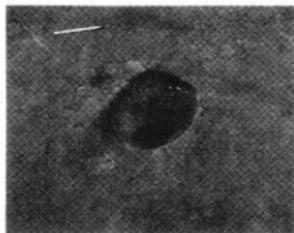
7. 5号土抗完掘



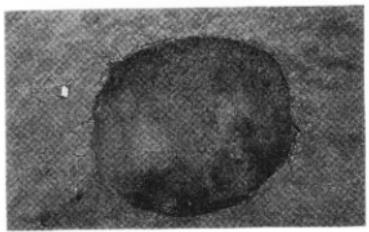
4. 18号住完掘
35.10.15.



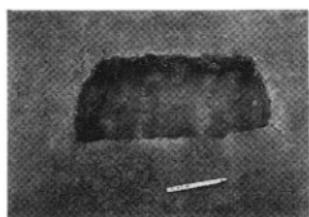
8. 6号土抗完掘



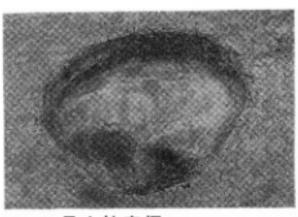
1. 7号土抗完掘



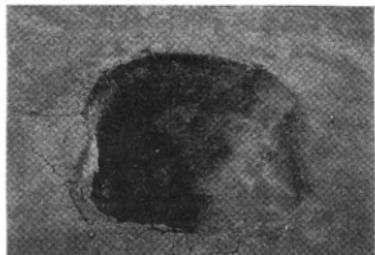
5. 14号土抗完掘



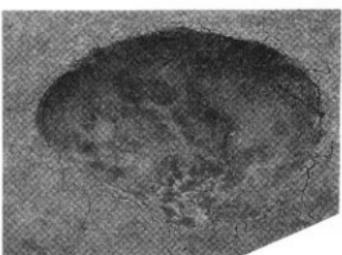
2. 8号土抗完掘



6. 15号土抗完掘



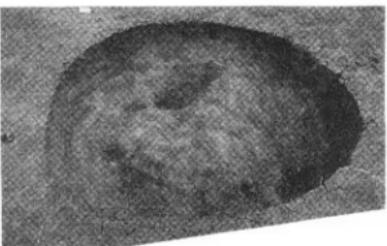
3. 12号土抗完掘



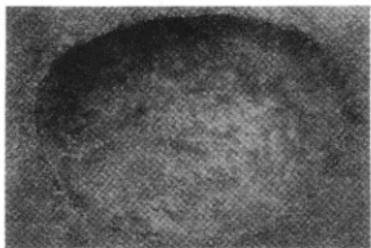
7. 16号土抗完掘



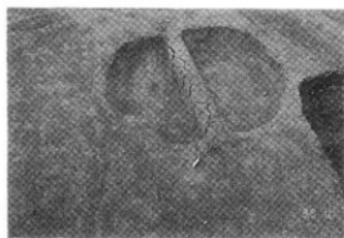
4. 13号土抗完掘



8. 17号土抗完掘



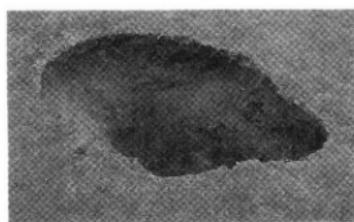
18号土抗完掘



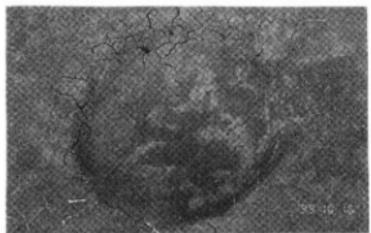
21号土抗完掘



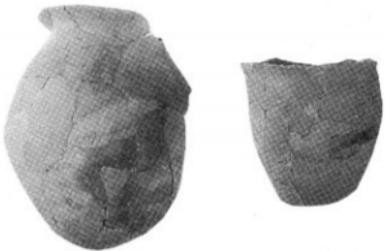
19号土抗完掘



23号土抗完掘



20号土抗完掘

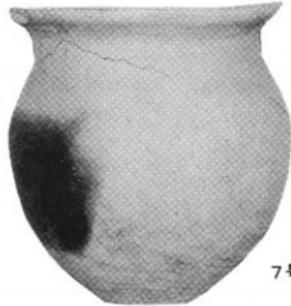


1号住



2号住

4号住



7号住

第2号住・4号住・7号住居跡出土遺物



5号住



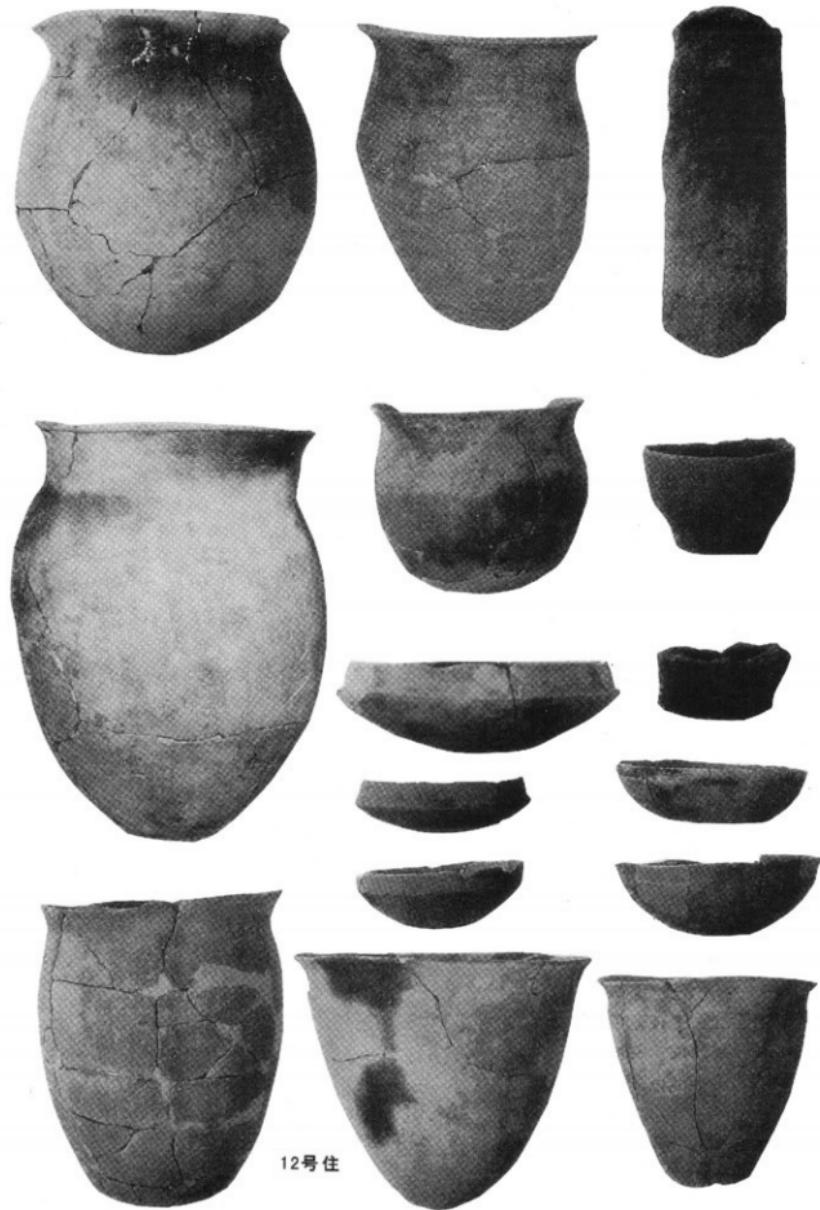
8号住



10号住

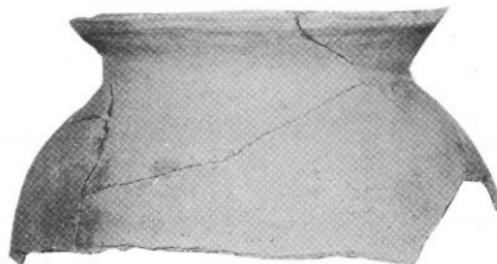


第5号住・8号住・10号住居跡出土遺物

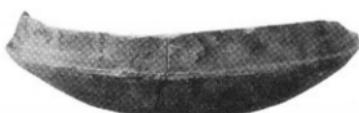


12号住

第12号 住居跡出土遺物



11号住

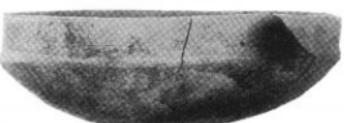
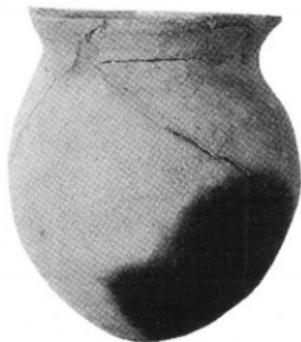


13号住

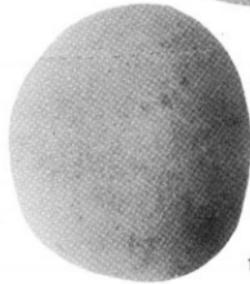


14号住

第14号 住居跡出土遺物



15号住



16号住

第15号住・16号住居跡出土遺物

十三仏遺跡

第2次発掘調査報告書

1999年12月

編集 鹿行文化研究所
汀 安衛
鹿嶋市青塚690

発行 十三仏遺跡調査会
麻生町教育委員会
麻生町麻生1561-9

印刷 久保田印刷
麻生町四鹿963-20